国立歴史民俗博物館研究報告　第94集　2002年3月

南島の中世須恵器
中世初期環東アジア海域の陶芸交流

The Medieval Sue Ware from the Southern Islands: Exchanges of Ceramics in the Pacific-Rim East Asian Seas in Early Medieval Period

吉岡康暢

はじめに
❶生産技術
❷型式分類と編年
❸アジア・列島の中世食器とカムィ焼
❹カムィ開窯をめぐる史的背景（予察）

[論文要旨]

鹿児島県徳之島カムィ窯の中世須恵器は，中国陶磁，九州西部産の石鍋とともに，南西諸島における貝塚時代からグスク時代への転換を具象するモノ資料として注目されてきた。小稿は，1984年度の調査資料について，型式分類とおおづかみな編年区分を提示し，ヤマト列島の東播（とうはん），常滑（とこなめ），珠洲（すず）の諸窯と並ぶ広域窯でありながら，中・小形壺を主産品とする器種組成の特質と，従来からいわれてきた，高麗陶器を主，中国陶磁を従とする技術・意匠を具体的に検討する。その上で，11世紀後半～12世紀前半の環東アジア世界における“人・モノ・技”の交流の実態とシステムの解明に向けた予察を試みる。

カムィ焼は，甕・壺・鉢・椀の4器種よりなり17種31類に分類したが，多様な壺類は高麗の陶技を基調とし，波状文の加飾も高麗系で，窯構造は九州南部と共通するなど，朝鮮半島（高麗），南九州（日本），奄美諸島（琉球）を包括する広大な南の境界域で誕生した海洋性の濃厚な中世陶器である。しかも，琉球王朝の成立に先行する中世初期，琉球海900 km圏に大流通したことは，南西諸島がヤマト列島の中世食器様式を生みだした物流のネットワークに連動しつつ，アジアの海洋国家の枠組みに組みこまれたことを物語っている。高麗から陶工を招寄したと考えられるカムィ窯の経営形態は，状況的に対宋・高麗貿易とかかわる港湾を掌握した薩摩南部の有力武士の主導下に，奄美諸島の按司（あじ）層と連係しつつ推進された，中世前期の“倭寇的世界”の所産と推定する。中世初期の日麗間の文物・技術の交流については，日宋関係が成熟するまでの限定的な動向とされてきたが，カムィ焼のほかに高麗系屋瓦や刻画文陶器にみられる陶芸史にとどまらず，鏡・梵鐘など金工分野での近年の研究成果によって，予想を上回る広がりと深みをもつと評価してよいであろう。

はじめに

グスク時代の南西諸島に流布した須恵器については，はやく1950年代後半に注目され，60年代後半以降，「琉球式須恵器」[1]あるいは「類須恵器」[2]と命名され，佐藤伸二，白木原和美による消費資料の集成と編年作業がすすめられた。佐藤は壺類の加飾・作工の型式学的編年案と南西諸島内での一元的生産地を想定し[3]，白木原は朝鮮半島西岸の陶質土器に出自を求める予測的見解を述べた。以後，1981年に鹿児島県徳之島・カムィ窯跡群（大島郡伊仙町阿三）の発見・調査が実施され[4]，窯構造が肥後南辺の球磨（くま）窯跡群下り山（さがやま）窯[5]（熊本県球磨郡錦町一武（いちぶ））と近似することが指摘されるとともに，南島の中世須恵器の基礎データが提示された。さらに1996～99年の詳細分布調査によって，1×2 km圏で9支群約80基が確認され，100基を下らない大規模窯であることが周知されることとなった。この間，安里進はカムィ焼を中国陶磁，石鍋とセットで南西諸島における貝塚時代からグスク時代への移行を示すモノ資料としてとらえ[6]，在地土器を包括した食器様式の推移を概括し[7]，池田榮史はカムィ焼の消費資料地名表を作成して今後にそなえる[8]など，カムィ窯をめぐる考察が深められようとしている。

小稿は，これら先学の業績をふまえて，まずカムィ焼の生産技術および器種組成の特質を明確化したうえで，文献史では捕捉が至難な中世初期の環東アジア世界における，“人・モノ・技”の交流の実態とシステムの解明に向けた予察を試みるものである。ただ，前提となる編年作業は，窯別の一括資料にもとづく「窯式」の設定をまたざるをえない現況にあるため，通時的な型式分類にとどまっており，厳密な遺物論は後考による補正を要する。カムィ焼が琉球海全域へ流通する過程は，南西諸島の貝塚時代からグスク時代への転換と緊密にかかわっていることは確かであるが，中国大陸・朝鮮半島・ヤマト列島[9]をはじめとするアジア諸地域の窯業生産，経営形態および流通機構，諸王権の外交・貿易政策あるいは在地支配層との関係といった，多面的なテーマの総合的研究が要請されるなかでの基礎作業であることをおことわりしておきたい。

❶……生産技術

（1）製作技術

成形—調整—加飾の3工程に分かれる。小壺や埦の一部に紐轆轤成形品の可能性をもつ個体が留保されるものの，基本的に大形品から小形品まで紐叩打成形，轆轤調整による画一的な製作技術によっている。観察によって推察される甕・壺類を中心とした製作順序はつぎの通りである。①底部は明瞭な成形痕をとどめないが，手捻りで底割れしないよう押圧を加え粘土円盤をこしらえているとみられるが，今後，高麗陶器との関係をみる上で叩き痕の有無の確認が必要である。②円盤側縁部に粘土紐を巻きつけ（図1-1, 2），積み上げて胴部を成形する。そのばあい中・小形品は胴部上端まで一気に成形し，大形品は何段かに分割して乾燥させ上へ積み上げているとみられる。前期の甕・壺類には，内壁に幅2 cm前後の紐積み痕をとどめ（図1-4），器厚0.5 cmていどの薄い器壁に仕上げるのが一般的で，細い粘土紐（いわゆる「ヨリコ」）が用いられたと考えてよい。③成

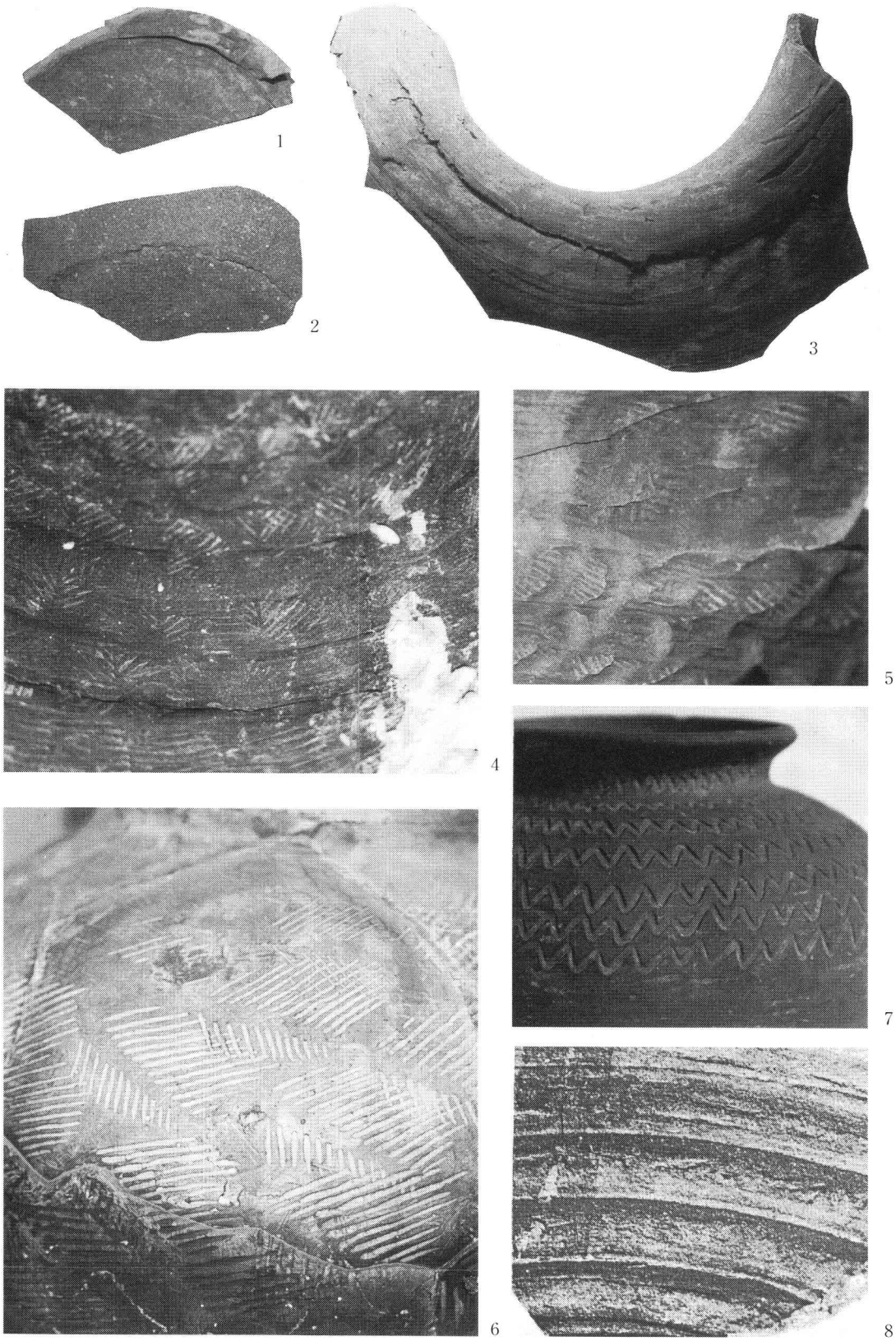


図1　カムィ焼の製作技術

1・2 底側の粘土紐巻きつけ，3 口頸部の粘土紐接ぎ足し，4 胴部の粘土紐積み上げ，5 横位叩き回し（伊仙町歴史民俗資料館資料），6 綾杉文叩打（ヤジャーガマ遺跡，沖縄県立博物館資料），7 篦描き波状文（内間遺跡，西原町教育委員会写真提供），8 器面凹条調整（註(4)）

形の第2工程として，上からみて右回り，横位の叩き回しによって胴部を叩き締め器形を決める（図1-5）。叩打は普通複数回施されるため，異なる方向の叩打・押圧痕が重なりあって内外面に残る。叩き出しも右下がりと右上がりが認められ一定しない。ただし，器形が単純な鉢・椀類で叩き膨らませる効果がどのていどあったかは検討の余地があり，とくに椀類については粘土紐の継ぎ目を消去・密着させ陶胎の気泡を押しだすていどで，細部の仕上げは調整工程で行う。④胴部器形が決まると，大きく開口した胴部上端の内側にさらに粘土紐を巻きつけ積み上げ後（図1-3），叩打によって口頸部を成形し，轆轤を利用して仕上げる。播磨・東播（とうばん）焼，讃岐・十甕山（とがめやま）焼など瀬戸内の中世須恵器の甕・壺は，胴部と口頸部は連続的に筒状の概形を整え，「一連叩打技法」[10]によって器形を決めるが，胴部と口頸部の叩打痕は前記2窯では逆方向にプレスされ，口頸部の二次成形のさい打圧具を持ちかえて叩打している。讃岐・陶窯では，9世紀以来いわゆる十瓶山型長胴壺が連綿と生産されてきたが，一連叩打技法の採用は11世紀半ばとされ[11]，中世的成形技術の一環として評価できる。カムィ焼は口頸部に打圧痕をとどめるため，擬一連叩打技法の現象を呈する。

口端部の成形は，轆轤回転を利用しているとみられる。調整工程では，⑤甕・壺類は外面の叩き目を削りに近い強い撫で回しにより器体に連続的な稜面を生じたものと，撫でによって消去しようとした個体が目立つが，消去のていどは一様でなく，かなり明瞭に叩き目をとどめた個体も少なくない。内面の押圧痕は木口刷毛目などによる調整のほか，特徴的な角ばった板状具による轆轤のひだ目状の強い押引きによって深い条溝が走るもの（「器面凹条調整技法」）（図1-8）が古い段階で存在する。上記の調整工程にみられるばらつきが，時間的変遷のなかでとらえられるのか，カムィ焼の通時的な個性なのかは，今後検討を要しよう[12]。外面の打圧具は平行条線文が普通であるが，壺の一部には樹枝文（図10-7）ないし葉脈軸を欠いた綾杉文原体（図1-6）が使用されている。内面の押圧具は平行条線文のほか，方・長方ないし正・斜の格子目が大半を占め，樹枝文・重孤文・放射（扇形）文・蜘蛛巣文などのバラエティがあるが，特定器種との相関性は認められないようである。

製作技術の最終工程は，加飾である。⑥カムィ焼の加飾法を代表するのは，壺の上胴に施す箆状具による波長がゆったりした「波状文」帯である（図1-7）。沈線による2,3段の区画帯に6〜9条，あるいは3〜5条を上からみて右回り（轆轤左回り）に入れている。波状文壺の消長については佐藤伸二の考察があり，区画帯に1本描きの波状文がめぐる段階（AⅠ類）から，波状文が螺旋状に施される段階（AⅡ類）を経て，区画帯が無視され（AⅢ類），螺旋手法のみによる波状文壺（B類）へ推移し，無文化の方向をたどるとされ，大方の承認をえている。そこでは完好資料の豊富な壺BⅡ$_{3\cdot4\cdot5}$類のデータが活用されたが，壺ではA，BⅠ・Ⅱ類の普遍的な加飾法として用いられており，法量も少ないながら$_2$類で認められ，7号窯でも胴部片が出土しているのでⅠ期から存在したことになる。

試みに，第Ⅱ支群出土の上胴部まで遺存する前期（Ⅰ・Ⅱ期）に帰属すると判断される壺A・B類での波状文壺の量比を1984年度の報告書[13]記載分についてみると，29%（43/148）に達するが，装飾壺の実数はかなり割引いて考えるべきであろう。ただし，前期に限れば，佐藤がとり上げた壺B$_{3\cdot4\cdot5}$類では大半が波状文壺となろう。波状文の加飾は，壺のほかは広口壺形の鉢D$_4$類に1点例外的に認められるにすぎない。なお，波状文とリンクする付加的な加飾法として，波状文中・小壺の肩にとりつけた1対ないし3〜4耳の縦位の円環と，小形壺の頸部に小円孔を穿つ例が若干み

られる（図3，A・BIII類）。今後，佐藤案を出土状況および施文原体，波形と法量を含む器種との関連で追証することで，波状文壺の社会的機能，ひいてはカムィ焼の性格と南西諸島の葬祭儀礼の一端に迫れるであろう。

ついで装飾叩打文として，「樹枝文」または「綾杉文」原体を横位叩き回しに使用した壺 A_2 類の装飾壺が少数ある。平行条線文叩きと異なり調整によって消去しようとした個体はみあたらないようで，装飾文として明確に意識されている。カムィ焼のばあい，東日本の珠洲焼のごとく平行条線文叩打による加飾化が希薄なことは，粗い重ね叩きや調整による消去，あるいは中世須恵器に一般的な縦位の蛇行ないし隔列叩打[14]がみられないことからも妥当性がある。樹枝文・綾杉文は，鉢A・B類の内底に消去されずに残っている例からみても，高麗系の加飾性が濃厚な図文と考えられていたのであろう。

また，カムィ焼には篦描き刻文をもつ壺が少数あり注目されている。これについても詳細な点検が必要であるが，施文部位は，①上・下胴部外面のほかに，②胴部内面，③口縁部内面，④底部外面，⑤底部内面に認められるとされ，図形は①「×」を基本とした「✳，※，⧖」と，②「＋」の単位を複合させた「#，⧺，⊞，⧺」の2グループに分かれる。表記は全体に粗野で，一見落書きを思わせるものが多いことは，部位が特定されないこととあわせ解釈を困難なものとしており，部位・図形の規則性から加飾法の一類とできる東日本の渥美焼・珠洲焼[15]と差異がある。刻文の意味を理解せず模擬的な表現にとどまった点で，後述する鉢C類の卸し目などに通ずる心意がうかがえよう。

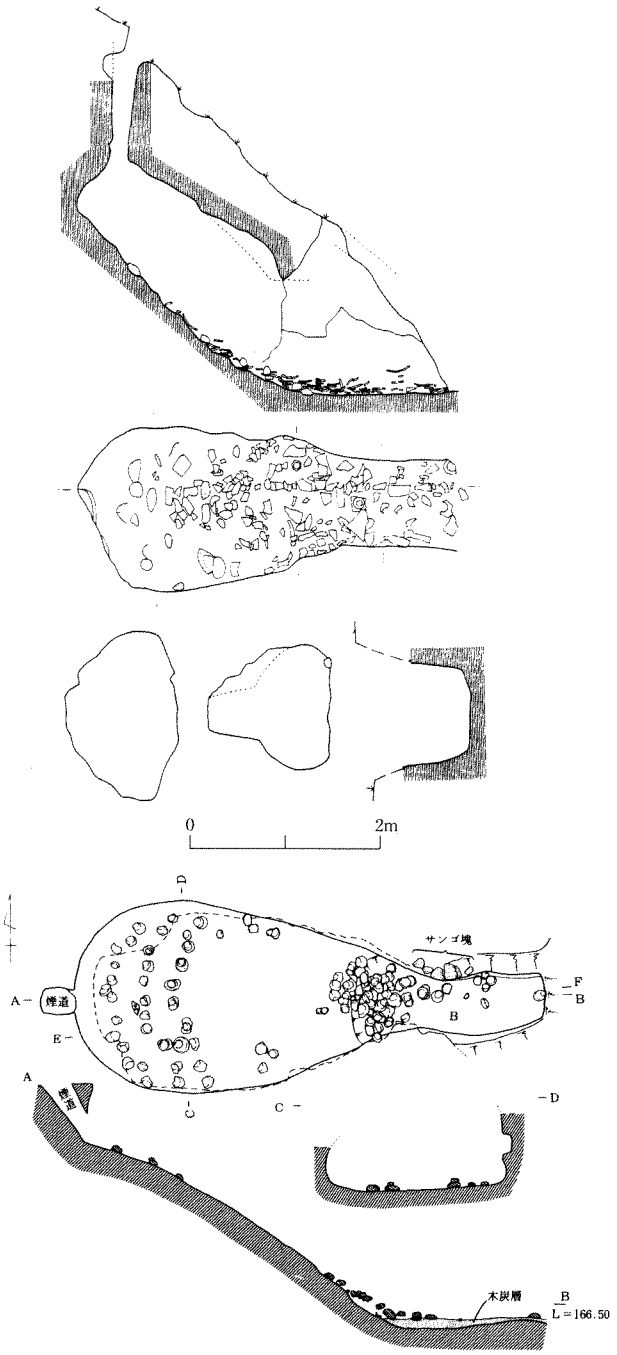


図2　下り山1号窯（上）とカムィ窯II支群3号窯（下）の窯構造（註(4)・(5)文献）

（2）焼成技術

全長4.7～8.4 m，幅0.8～2 m前後，高さ1 mほどの地下式無段穴窯で，平面は焚口が収縮する徳利形を呈し，立面は水平な燃焼部から30～40度前後の急傾斜をなす焼成部へ移行する窯構造が明らかにされている。煙道部のとりつき位置と立ち上がり角度が異なるが，肥後南部の下り山窯に近似することが指摘されており（図2），急傾斜に製品を固定する馬爪形焼台を使用するのが特色である。第II支群の発掘資料の大部分は，青灰色ないし灰色を呈し焼成堅緻な還元焔燻べ焼成品であるが，陶胎断面の芯部分はセピアに発色しサンドウイッチ状をなす。これは素地の成分や焼締度とのかかわりを吟味する必要があるが，東海を中心に展開する瓷器系中世陶器と逆の現象であり，還元焼成による攻め焚きが不十分な結果と考えられる。

❷……型式分類と編年

編年については，前記佐藤・安里によって方向づけがなされ，小文も両氏の作業に導かれてアウトラインを模索したが，正確な編年軸の設定には窯跡別の一括資料が不可欠であり，詳細分布調査をふまえた鹿児島県立埋蔵文化財センター・伊仙町教育委員会の成果報告が鶴首される。また，編年と一体的な型式分類については，甕・壺瓶・鉢・椀4類の大区分にとどまっているので，1984年度の調査資料によってやや詳細に点検を加えたが，これも編年との絡みで流動的要素を残している。図3の作成にあたっては，カムィ窯第II支群の発掘調査で確認された，（7）→4→6→5号窯，2→3号窯窯体（燃焼部・焚口部・前庭部，一部煙道開口部および溝）の出土遺物の先後関係を軸に，複数型式を包含する灰原遺物についても層序による所見を援用して前期と後期に大別し，さらにそれぞれを2分してI期（7号窯段階），II期（4号窯段階），III期（6号窯段階），IV期（5号窯段階）とした。ただ各期とも単一型式の一括でないため編年区分の指標は明確でなく，援用した消費資料も共伴関係が不安定なため正確を期し難く，型式学的操作優先の暫定案にとどまり，型式分類に主眼をおいたものである。以下，甕2種2類，壺4種9類，瓶2種4類，鉢7種10類，椀2種6類，計17種31類に分類し，器種別に概要を述べる。

甕

口胴指数[16] 60～70台の広口で，胴径と器高比が1対1ほどの肩の張らない長胴の器形を甕とした。口縁形態によってA・B類に大別した。法量は口径値を目安に，1類（口径30～40 cm台），2類（20 cm台後半），3類（20 cm台前半），4類（10 cm台）に分かれるが，$_{1\cdot2}$類と$_{3\cdot4}$類間にギャップがあり，大甕と小甕に分かれる。口縁形態は甕独自の型式は存在せず，つぎに述べる壺の型式分類を準用する（図3・4）。

〔A類〕 前期に帰属する環状口縁を中心とする甕。大甕は，短いa2類口縁がゆるく外傾し，胴部がなだらかに張り出し底部へ移行する口径指数75以上の196タイプが知られている。数少ない小甕は，方頭系のe2類口縁で丸肩の㉜，g1類口縁でずん胴の88などがある。

〔B類〕 後期の方頭口縁を主体とする甕。大甕は，長く口端の作工のあまいe3類口縁，口端が肥厚・内傾するe5類口縁の198・200のほか，内端あるいは外端をわずかに摘み出したe3・e9

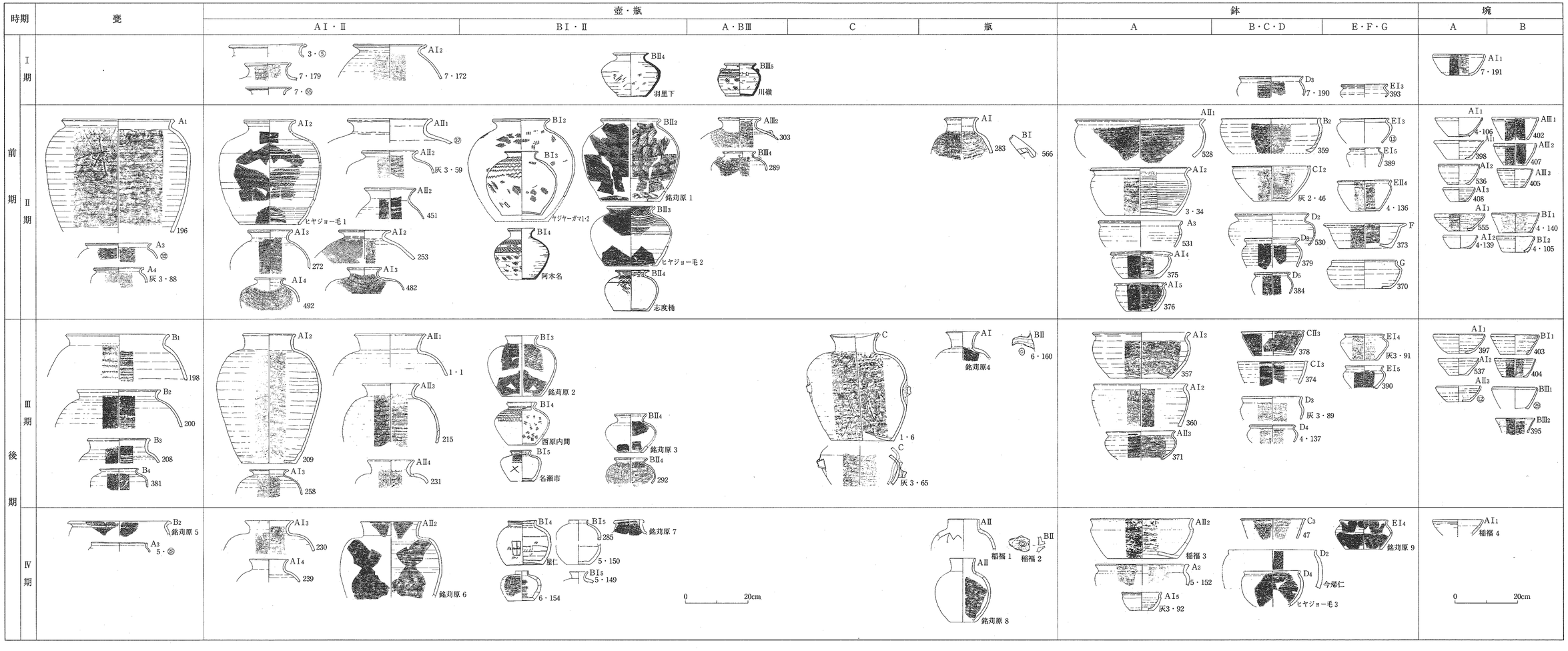


図3　カムィ焼（時期別）型式分類図　「5・100」は，第II支群5号窯・報告書II（1985）の土器番号（土器番号のみは灰原出土，○は報告書I），灰2＝上層・5号窯，下層・6号窯，灰3＝4号窯，「ヒヤジョー毛」は遺跡名（註(2)・(3)・(19)・(20)～(24)）

類口縁がみられ，いずれも外傾度が微弱で，撫で肩・丸肩の器形となる。小甕には口頸が直立した208などがある。IV期とした甕には，口端を上下に拡張したh3類口縁のずん胴タイプ，短頸のe5類口縁の小甕㉕などIII期までの甕とモデルが異なる変則的なものをあてた。

壺・瓶

頸部が強くくびれ，口径指数40～50台を典型とする長胴あるいは球胴の器形を壺，筒状の口頸部をつけた長胴壺や注口をもつ壺を瓶とする。口端の作工，口頸の長短と立ち上がり角度，口径の広狭，怒り肩と撫で肩，球胴と直胴，体部の重心の位置などの組みあわせによって多くのバリエーションの設定が可能視されるが，ここでは胴径と器高比によってA類長胴とB類球胴に大別し，それぞれを口胴指数40～55台のI類並口，狭口と，56～60台のII類広口，III類有耳（有孔）の分類にとどめた。C類は球胴壺に特徴的な双耳方環をとりつけた特殊壺である。瓶類は長頸瓶と水注が認められる。なお波状文を型式分類の指標とする見解もあるが[17]，中・小壺に多用されるものの特定器種との相関性は壺の細分とあわせ今後に期すこととし，それの有無による分別は避けた。法量も消費遺跡の完好品と生産遺跡の復原品から，1類（器高・胴径40 cm台，

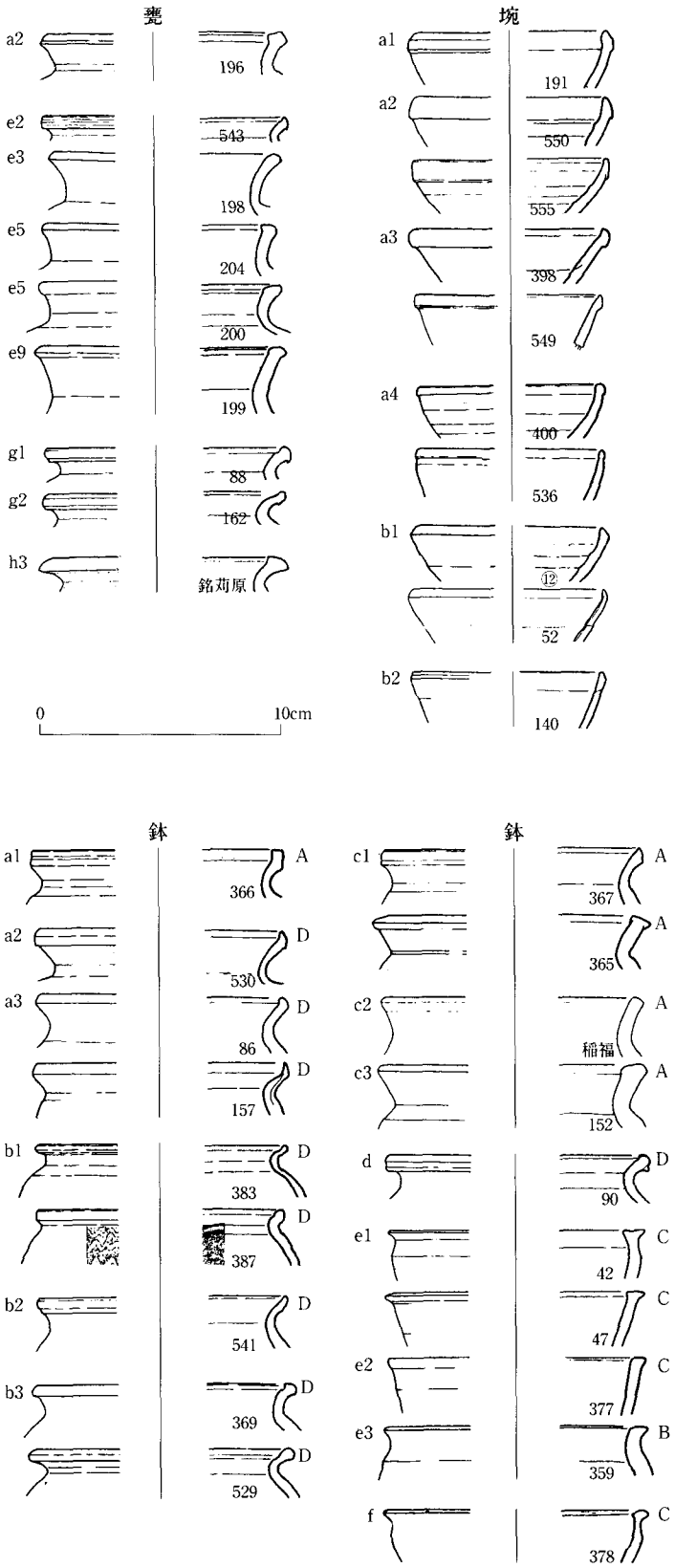


図4　甕・鉢・椀類口縁型式分類図　「196」は報告書IIの土器番号（○は報告書I，左上は器種分類）

口径27～21 cm台)，$_2$類（器高・胴径30 cm台，口径24～14 cm台)，$_3$類（器高・胴径20 cm台，口径17～10 cm台)，$_4$類（器高・胴径10 cm台，口径10～7 cm台)，$_5$類（器高・胴径10 cm前後ないし以下，口径10 cm以下）に一応区別するが，機能差を知るための容量による区分になっていない。

壺類の口縁形態は，時間的推移を敏感に反映する編年指標であり，安里によって環状口縁から方頭口縁への流れが指摘されている[18]が，型体指数による大分類の解説に入るまえに，口縁の型式分類を整理する（図5)。

壺の口縁形態は，口縁を折り曲げ縁帯を作出ないし貼付する環状口縁（a～d・g類）と，口頸が外反ないし直立ぎみに立ち上がる単純口縁（e・f・h類)，口頸が内傾する玉縁口縁（i類）に大別できる。カムィ窯第II支群の発掘調査で確認された最古の7号窯の遺物は，少なくとも2時期にわたるとみられるが，縁帯下端に鋭い稜線を作出ないし貼付した重厚な円頭口縁，およびシャープな稜角仕上げの口縁が古いと考えられる。それらを原型とする型式変遷の流れを整理してみたが，a類とd類，b類とc類のように親縁性を有する型式間では帰属の判断が困難な個体もある。

a類　口端を内屈させた稜環状縁帯の口縁。カムィ窯第II支群出土壺全体の10%強を占める。271タイプが最古型式とみられ，一応a1→a2→a3類の推移がたどれそうであるが，前期でも前半までの型式とみられる。

b類　断面三角形を基本とする受口状縁帯の口縁。a類と略同数存する。縁帯を内すぼがりに作る最古式の口縁を抽出しにくいが，b1類113など上下口端をしっかりこしらえた環状口縁がある。b2類がこれに続き，b3類は後出的で，とくにb4類は作工があまい退化型式といえる。水平に折り曲げた口縁上端を上へ摘み上げたb4類，上端を嘴状としたb5類は時期的に大差ないように思われる。本類も大体前期に限られるようであるが，b5類の作工が崩れたタイプが後期に残る。

c類　内面有段とし舌状に外転する口縁。全体の約20%を占め，e類とともにもっとも普遍的な型式である。c1類の2例は7号窯出土で，c2・c3類は幾分後出とみられるが，c2類177は7号窯灰原から出土しており，口端をしっかりした円頭にこしらえるc3類422も古い様相を示す。上端をわずかに摘み上げただけのc4類はb4類との区分が微妙であるが，特徴的な横位の樹枝文叩打を施した大壺253を例示した。c5・c6類は後期に下り，例品は少ない。

d類　上端を短く摘み円頭または尖頭仕上げとした口縁。約15%を占める。d1類を原型として一応d2→d3類の流れをたどれるが，b4・b5類との判別が困難な個体もある。ほとんど前期におさまるようである。

e類　縁帯を作出せず，くの字ないし直立ぎみに立ち上がる単純口縁。後期が主流を占める唯一の型式で，量比は約25%ある。大勢として環状口縁から単純口縁へ変移することが確実なので，a～d類の最古型式からの派出型式とすることも可能であるが，ここでは7号窯体内出土のe1類㊸を抽出してみた。口縁外端でシャープな面をとるe2類から作工のあまいe3類への変移を基本とするが，少数ながら口端を肥厚させるe4→e5類，短頸の直立する口縁e6類，長い口頸がゆるく外傾ないし筒状に立ち上がり，上端を平坦あるいは内削ぎに仕上げるe7類，薄手の円頭口縁e10類，小壺に多い短い尖頭口縁e11類など，前期の範型から逸脱したものが後期に現れると考えられる。ほかに平直な外端を嘴状に挽き出すe8類，わずかに突出させたe9類も当類に含めた。

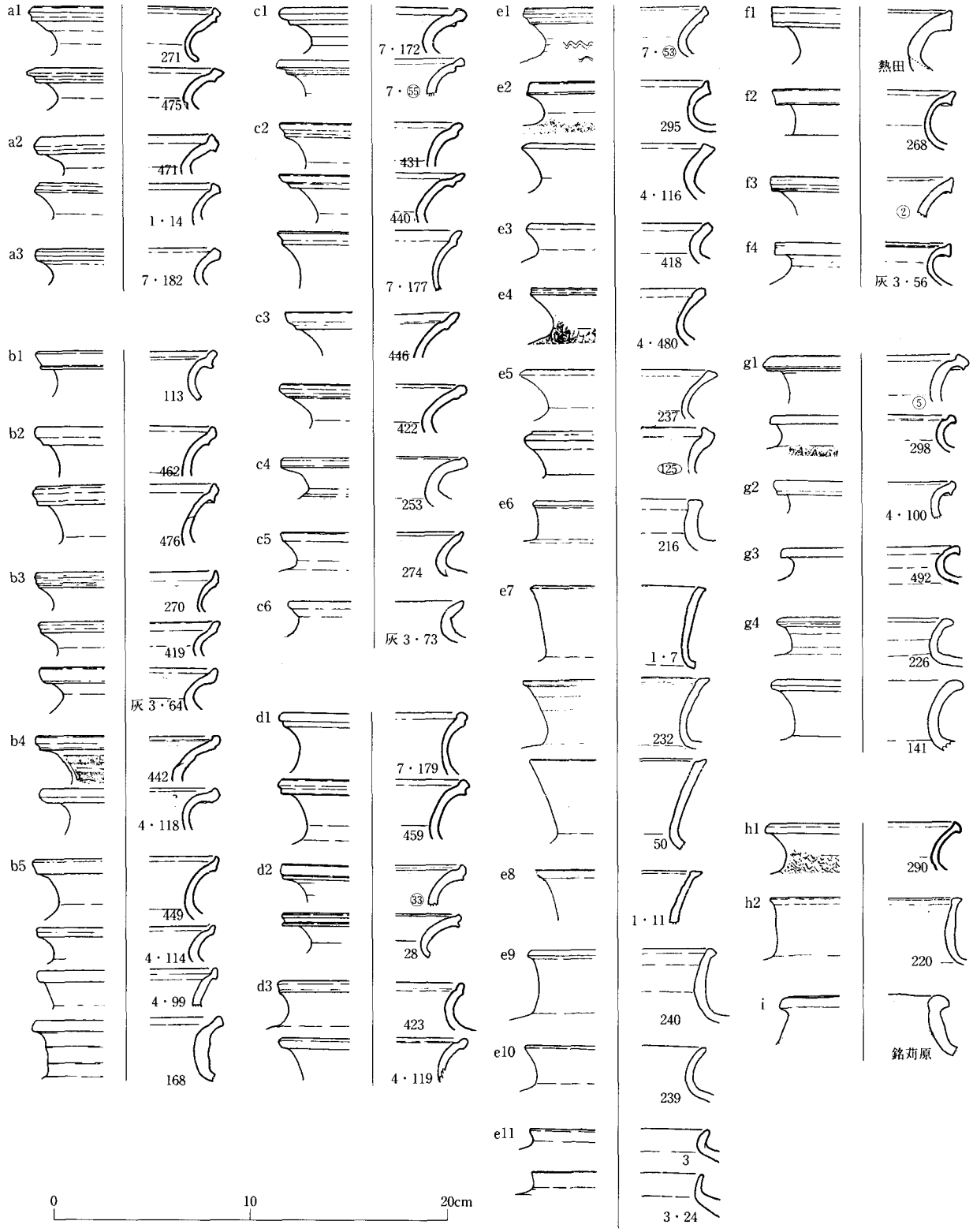


図 5　壺類口縁型式分類図

f類　くの字に外反する縁帯外縁を拡張ぎみに平直におさめた口縁。g類とも各々5%ていどしか存しない。e類の亜種とすることもできるが，恩納村熱田貝塚[19]出土のf1類を原型にすえ，f2・3→f4類の推移を想定し1型式を設定した。

g類　先端を嘴状に反転した口縁。g1→g3→後期のg4類の変化を想定できよう。g2類は下端を垂下するので当類に加えたが，g1・3・4類とは縁帯の作工が異なる。

h類　両端を拡張しT字状とした口縁。少数ながら前期から存在するが，後期に増加するようである。h1→h2類と変移し，後期に2類は口頸直立する。

i類　狭口で口端を玉縁状に肥厚させ頸部内傾するi類は，後期独自のタイプで，中国陶磁写しの新型式である。

つぎに，壺瓶の型式分類を概括する（図3）。

〔A類〕　口径指数40～50台，高胴指数100前後，ときに120ほどのAI類並・狭口長胴壺を主体に，一部口胴指数56以上のAII類広口長胴壺が存する。AI類は，前期は頸部で鋭角にくびれ弧状に強く外反する長い口縁から，丸肩ないし撫で肩で平底へ移行する器形を標準とし，怒り肩の体部は少ない。底径が口径を上回る那覇市銘苅（めかるばる）原遺跡[20]出土II期1は前期のモデルとできよう。口胴指数40台の口頸が収縮し，上胴が大きく張り出し平底へおさまる長胴壺II期253・482のタイプが定数みられ，カムィ焼の特徴的な器形として抽出できよう。後期に下ると外端で面をとった一般的なe3類，口端が肥厚するe5類などすでに指摘されているように，長い口頸がゆるやかあるいは直立ぎみに立ち上る方頭口縁が主流となり，端部の作工も上端を平坦ないし内傾，あるいは外端を嘴状に突出させた各種の方頭口縁がみられ，IV期には円頭・尖頭が目立つ。高胴指数が120を超える長胴壺III期209のタイプが後期に出現する普遍的な器形かなお検討を要するが，銘苅原遺跡出土IV期6などAII類でも類似の器形が存し，IV期につづく同一系譜の細別型式とすることは可能である。胴部最大径以下の判明する生産資料が少ないためAII類の量比は確定できないが，10%を超えることはないとみこまれる。普通の丸肩のほかに，広口・撫で肩でずん胴タイプII期59などが知られ，広口・撫で肩のII期451タイプも特色がある。

法量は，とりあえず口径値を目安に区分を試みると（体部形態を勘案し生産・消費資料からシミュレートした$_1$～$_5$類の口径値の重複部分の個体数は折半して算出），中形の$_2$類29%，$_3$類55%，計84%で大半を占め，小形の$_4$類13%が続き，大形の$_1$類は2%にすぎない。$_5$類は若干である（図6）。

〔B類〕　高胴指数70～85台の球胴壺。口胴指数45～55ほどのI類通有の並・狭口壺と55以上のII類広口壺に大別でき，量比は大差ないようである。A類とB類の量比は確定できないが，消費遺跡に豊富なデータがあるI・II$_3$・$_4$・$_5$類は，ほとんどB類で，A類が大・中壺を主体とするのに対し，カムィ焼の壺を特徴づけるB類の中心は中・小壺と推定される。前期では，BI類は久米島ヤジャーガマ遺跡[21]，BII類は銘苅原遺跡，同市ヒヤジョー毛遺跡[22]などに完好品があり，口径の広・狭と別に，器体は胴高80後半～90台の標準的な球胴壺と70～80台前半の扁球胴壺があり，細別の余地がある。

A・B類には前述のごとく，少数ながら上胴に縦位の円環状把手を，ときに頸部に小円孔を穿った装飾壺がありIII類として区別した。例外なく波状文壺で，$_1$類を除く各種法量の個体が確認で

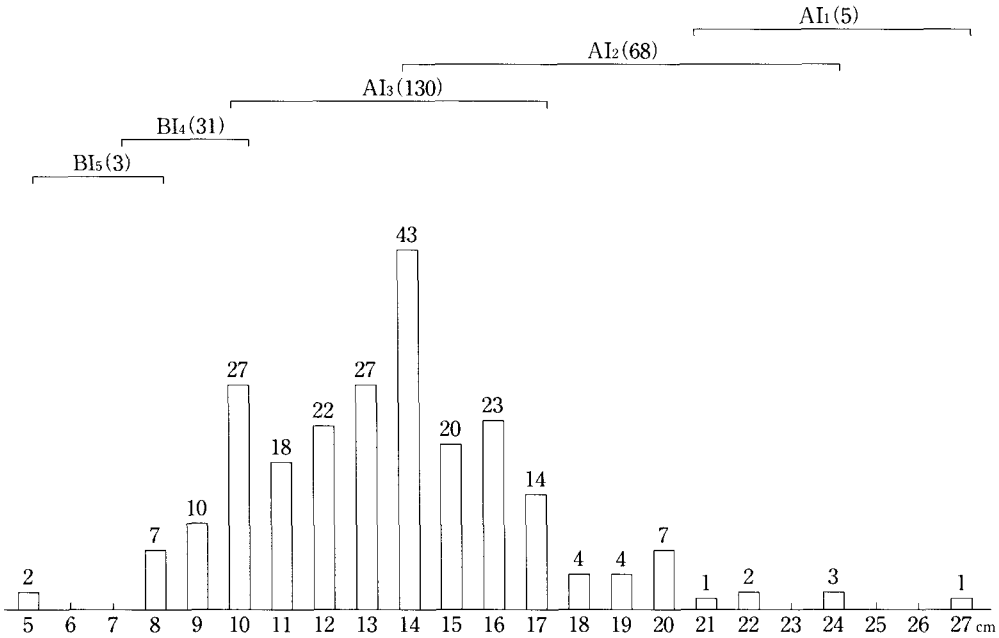


図6　壺類の口径値による法量分類　＊棒グラフ（　）の数字は個体数

きる。小壺の耳環は1対であるが，大壺の耳環数は未詳である。

〔C類〕 直立ぎみの長い方頭口縁から広底直胴の胴部へ続く器体に，1対の方環耳を横位にとりつけた壺。第II支群で10個体以上の出土が報ぜられ，7号窯で把手が出土しているので最古期から存在する器種としてよい。怒り肩の6と撫で肩の65が併存し，細別型式の設定が可能である。方環耳は手を挿入できるよう中胴をくぼませた個所に貼付されている。

瓶類は，扁長胴または扁球胴の器体に長い筒状の口頸がつくA類長頸瓶，B類水注がある。長頸瓶には環状のg2・h1類ないし方頭のe7類口縁で，口頸外反するI類（283・銘苅原4）と，長胴に直口縁がつくII類（稲福1・銘苅原8）がある。I類は灰原から別に出土している注口が合体する可能性があり，II類と同一系累とできるか疑問である。I類が水注とすると扁長胴となり，別に大里村稲福遺跡[23]や今帰仁村今帰仁城（なきじん）跡[24]から出土した球胴の2タイプがあることになり，6号窯出土の短い注口160は球胴タイプに伴うのであろう。

鉢

広口でほとんどの器形が頸部でくびれ，器体が低平ないし半球形の器種を鉢類とする。胴径と器高比が2～2.5対1ほどの器体が低平なA・B・F類，器高比が大きく底部が収縮する桶形のC類，器高比がさらに高く逆台形ないし半球形のD・E類，肩衝きの扁平な器体に内すぼがりの短い口頸がつく独特のG類，の4グループに大別できる。A・B類が第II支群出土全体の36%，C類が14%，D類が46%を占め，F・G類はごく少数である。過半を占めるD類は器形を復原できる個体が皆無で，A類との区分が難しいものもみられ，今後型式の補正と量比の変更が予想される。

鉢類の口縁形態は，方頭を基本とするが，多様な器形を包括しとくにD類は変化があり，B・C類に鉢独自の型式がみられる（図4）。

a類　口縁端を内屈させる環頭口縁の流れをくむとみられるもの。鉢D類を中心にA・E類におよぶ。口縁端を肥厚させるa1類は，壺口縁a1・b2類と同工タイプで，a2・3類も壺b3類に通じるが，報告書II 157など少数ながら口縁端を鋭い嘴状に内屈させたものは独自の型式といえる。

b類　口縁端が外屈・外傾し，玉縁状におさめるなど受口状口縁の系列に属するもの。一部鉢A類を含むが大多数はD類で占める。b1類と壺b4・5類，b2類と壺c3類，b3類と壺d2・3類に対応関係が認められる。

c類　鉢類で主体をなす方頭口縁系。A・D・E類で一般的である。口端面を強く撫で回して凹状とし下端を嘴状に突出させ（367），あるいは平直な端面を上下に拡張ぎみにつくる（365）など鋭角的な手法のc1類から，調整のあまいc2類，端部を肥厚させたc3類へ推移するのは，壺e1・2類からe3～6類への推移と同じい。

d類　方頭口縁系で，口縁下端に細縁帯を補強した前期固有のタイプ。壺f3類に対応するが，僅少である。

e類　鉢類独自の型式で，平直な口縁上端を内外に拡張または外へ突出させ，口頸のくびれがほとんどないタイプ。e1・2類は鉢c類，e3類は鉢B類に帰属する。

f類　口頸でかるくくびれ口縁端が玉縁をなすもの。壺h3類に該当し，僅少とみられる。

つぎに，鉢各類について要説する（図3）。

〔A類〕 頸部がしっかりくびれ外反する方頭口縁で，胴径が口径を若干上回る丸肩・広底の鉢。口径40 cm台の$_1$類から11 cm台の$_5$類まで揃っている。器高差に幅があり，高胴指数47～50ていどのI類と，36～40ほどの低平なII類に分かれる。小形の$_4$・$_5$類はすべてI類である。後期には，頸部のくびれが鈍化し，口縁端が肥厚したe3類口縁357や，口端の仕上げのあまい長めの口縁がゆるやかに外反する稲福3などへ移行する。外壁の調整は，大半が撫で仕上げとするが，叩打痕を残すものも少なくない。内壁は撫で調整のほかに，器面凹条調整によって押圧痕のすべてまたは上胴のみを消去する個体が定数あり，前期に限られるようである。

〔B類〕 外端あるいは内端を摘み出した短い口縁がわずかにくびれる，撫で肩・広底の鉢。A類と略同一型体で，深身と浅身の器体が存するようである。口径30 cm前後のB_2類のみ確認。A類でみられた2種の内壁調整技法に加えて，櫛目による撫で回しが認められる。後期のあり方は明らかでない。

〔C類〕 A・B類が盤形鉢としてくくれるのに対し，頸部がほとんどくびれない半球形ないし逆台形のプロポーションを呈する擂鉢形鉢。一応A・B類は盛器，C類は調理器として区分できると思われるが，数は少ない。$_2$～$_4$類が存する。調整は内外壁ともA・B類と大差ないが，局部に篦か棒状具，あるいは数条1単位の粗雑な卸し目を施すのが特徴的である（378・374）。器体上胴が膨らみをもつものから直線化するタイプへ変移するとみられる。低平な器体に玉縁がつく378は，擂鉢形と系譜が異なるのでII類として区別した。

〔D類〕 頸部がくびれ上胴が球状に張り出し，小さめの底部へ収縮する深身の鉢。中形の器高と胴径比は1対1.7～2ほどとみられる。$_2$～$_5$類がある。器形が正確に把握できておらず，将来細別の可能性を残す。前期の口縁形態は方頭を基本としながらバラエティがあるが，後期にはくびれが鈍化したあまい方頭へ推移し，末期にはわずかにくびれる口縁端が円頭に近く，体部が球形とな

る今帰仁城跡やヒヤジョー毛遺跡3のタイプに変化するようである。上胴を波状文帯で加飾した個体（報告書II 387）がまれにみられる。

〔E類〕 口縁が深く折れこみ怒り肩をなす狭底・深身の鉢。器高と胴径比は1対2ほどとみられる。上胴が強く突出した口胴指数85～95ほどのI類と，口径・胴径が大差ないII類に分かれ，胴部が低平で稜形を呈する393などが古いタイプとみられる。$_3$・$_4$・$_5$類が存し，大形は確認できない。

〔F類〕 広底から直線的に立ち上がり，長い口縁が鍔状に外展する平鉢。1点のみ確認。

〔G類〕 口がすぼがった低平な合子形の鉢。1点のみ確認。

椀

標準型A類のほかに，底径が大きく体部が直線的に立ち上がるB類があり，両類を器高比によってI～III類に細別した（図3）。A類とB類の量比は，それぞれ86%と14%ほどである。紐叩打成形後，轆轤で削りあるいは撫で回し調整仕上げとする。底部は無高台であるが，例外的にいわゆる碁笥底風の個体（106など）が若干見出せるものの，意図的に高台を作出したとは考えにくい。内壁を入念な器面凹条調整によって叩打痕を消去した椀は前期に限られ，とくにI期に目立つようである。法量は，$_1$類（口径14～16 cm台），$_2$類（12～13 cm台），$_3$類（11 cm以下）に大別したが，$_1$類から$_2$類への移行は漸移的で，$_3$類は6%にすぎず，A1類が79%を占めることとあわせ，かなり規格性が強い。

〔A類〕 底口指数40～55の標準型の椀。器高比によって高口指数40台の標準的なI類，35以下の低平なII類，50以上の腰高のIII類に区分したが，II・III類はA・B類あわせそれぞれ4%と14%で少ない。椀の口縁形態（図4）はほとんど例外なく白磁玉縁碗の仿製であるが，大半の器体上半が内彎傾向を示すのは，白磁碗II類の強い影響が看取され，カムィ焼の上限年代を示唆するごとくである。口端を明瞭な断面三角形ないし玉縁形に肥厚させたもの（a類）と内屈させただけのもの（b類）があり，両タイプの量比は約2対1で，後期には椀の生産量が大幅に減少している可能性がある。口端を重厚な冠状とした7号窯の191～193（a1類）が古く，幅広の三角口縁（a2類），玉縁口縁（a3・4類）から，薄手の内屈口縁（b1・2類）へ変移し，口端を心もち肥厚させただけの稲福4（c類）（図3）が終末形態かと思われる。

〔B類〕 底口指数60以上の広底椀。全体に体部が直線的に立ち上がる傾向があり，内攣ぎみの後出的な個体（395など）も若干存する。口縁形態，法量，器高比による区分はA類に準ずる。

❸……アジア・列島の中世食器とカムィ焼

カムィ窯は，東日本太平洋域の常滑・渥美両窯，日本海域の珠洲窯，西日本の東播諸窯とともに，南西諸島を一円流通圏とした四大広域中世陶器窯であり（図9），それの普遍性と特殊性の解明は，中世前期に北の蝦夷と南の琉球を連結した列島の空間構造把握の一鍵点となろう。まずカムィ窯の位置づけを明確化するため，窯跡構造が近似する肥後南辺の下り山窯跡を介在させ，器種組成と生産技術を検討する。

下り山1号窯出土中世須恵器の器種組成は，壺A・B類（大・中・小），広口瓶A・B類，水瓶，

鉢A・B類，椀A・B類よりなり（図7），12世紀前半代と考定される。下り山1号窯と東海・瀬戸内の諸窯との共通項として，①甕・壺瓶・擂鉢・椀の基本4種より構成され，それも1器種1型式を原則とし，大（中）小の法量分化によって機能性を高める生産原理は，後述する量産に適合した生産技術とともに，西日本の中世陶器に連係する。②個別的には特殊器種の広口瓶を共有するほか，③鉢類に客体的ながら有台片口鉢が見出せ，王子型水瓶とともに東海系器種を含むのが注目される。

ただし，器種が共通するとはいえ，①広口球胴の大甕が存せず，8斗～1石入りの大形貯蔵器は狭口長胴大壺が代替し，しかも生産量が少ないことがあげられる。大形貯蔵器の量比が低いのは，ヤマト列島の広域的拠点窯では例がなく，狭域的傍系窯の1指標となる。さらに，②下り山窯の貯蔵器を構成する狭口長胴大壺（大・中，壺$A_{1\cdot 2}$類）と狭口球胴広底壺（中・小，壺$B_{1\sim 3}$類）は，口頸部がいわゆる盤口瓶風に開展する広口瓶とともに，南九州の9,10世紀代の須恵器の形態的特徴を踏襲しており，東海・瀬戸内と異系の地域性を再生している。一方，③椀底部は退化した平高台状に作る点で，東播窯をはじめとする瀬戸内系椀に範型が求められる。④東海系とみてよい有台片口鉢（鉢B類）は，広島県鎌山窯[25]や例外的に東播窯などでも見出せるが，下り山1号窯の作工はかなり忠実な模作といえよう。いわゆる王子型水瓶[26]は注口を付していることを除けば，9世紀の猿投窯以来の東海系器種であるが，12世紀後半，常滑甕が瀬戸内沿岸から博多のルートで流入する前段階の東海系の点的挙動の背後事情は明らかでない。下り山1号窯の鉢類の主体をなす固有の椀形鉢（鉢A類）は，実用性はともかく擂鉢として認識されていたと考えてよいが，出自は確定できない。

製作技術についてみると，椀は紐轆轤成形後，鏝あるいは撫で調整仕上げとするのに対し，壺瓶・鉢類は少数の有段片口鉢以外は，外面細正格子文，内面平行条線文，あるいは布目痕の残る打圧・押圧原体を用いた紐叩打成形→撫で調整，椀形鉢は刷毛目→撫で調整されている。底部円盤も古代須恵器で加飾的要素をもった紐叩打成形である。なお，西日本の甕・壺類に多用される紐積みの筒状の概形から体部・口頸部を一体的に叩打成形する一連叩打技法は当窯の製品では認められず[27]，その点ではカムィ窯に通じるが，本窯では口頸部を叩打成形していない。下り山1号窯の製品は斉一的な器種組成と生産技術という西日本の中世陶器の枠組みの中で，在来系の諸型式をベースに一部東海系・瀬戸内系の陶技をとりこみつつ，椀形鉢のような固有型式を創出した点で，南九州の地域性を濃厚にまとった周辺狭域窯と評価できよう。

つぎに，下り山1号窯とカムィ窯の比較検討に移る。まず，共通項として，①甕・壺瓶・鉢・椀の基本4種より構成され，ヤマト列島の「中世陶器」（「中世須恵器」）の範疇に包括されることを確認しておきたい[28]。この器種組成自体は，中国・朝鮮も同じとみられやすいが，朝鮮では椀皿類は壺瓶類とともに高麗青磁が規範とされ，陶製の甕・鉢類は窯場でも供膳器窯（「磁器所」）の周辺に従属的に配置されているようで，列島では常滑窯に代表されるごとく甕窯が主体をなし周囲を椀窯がとりまく群構造をなし，窯業生産あるいは国家的管理体制との差異が反映されている。カムィ窯は明らかに貯蔵器主，供膳器従で日本型中世陶器窯といえるが，大形貯蔵器，擂鉢の量比や東海・西日本で共有の礼器を代表する広口瓶が存しないなど，列島の中世窯の規範が希薄な南島の中世須恵器の性格が端的に示されている。また，②下り山窯に近似する器種としては，型式が異なる

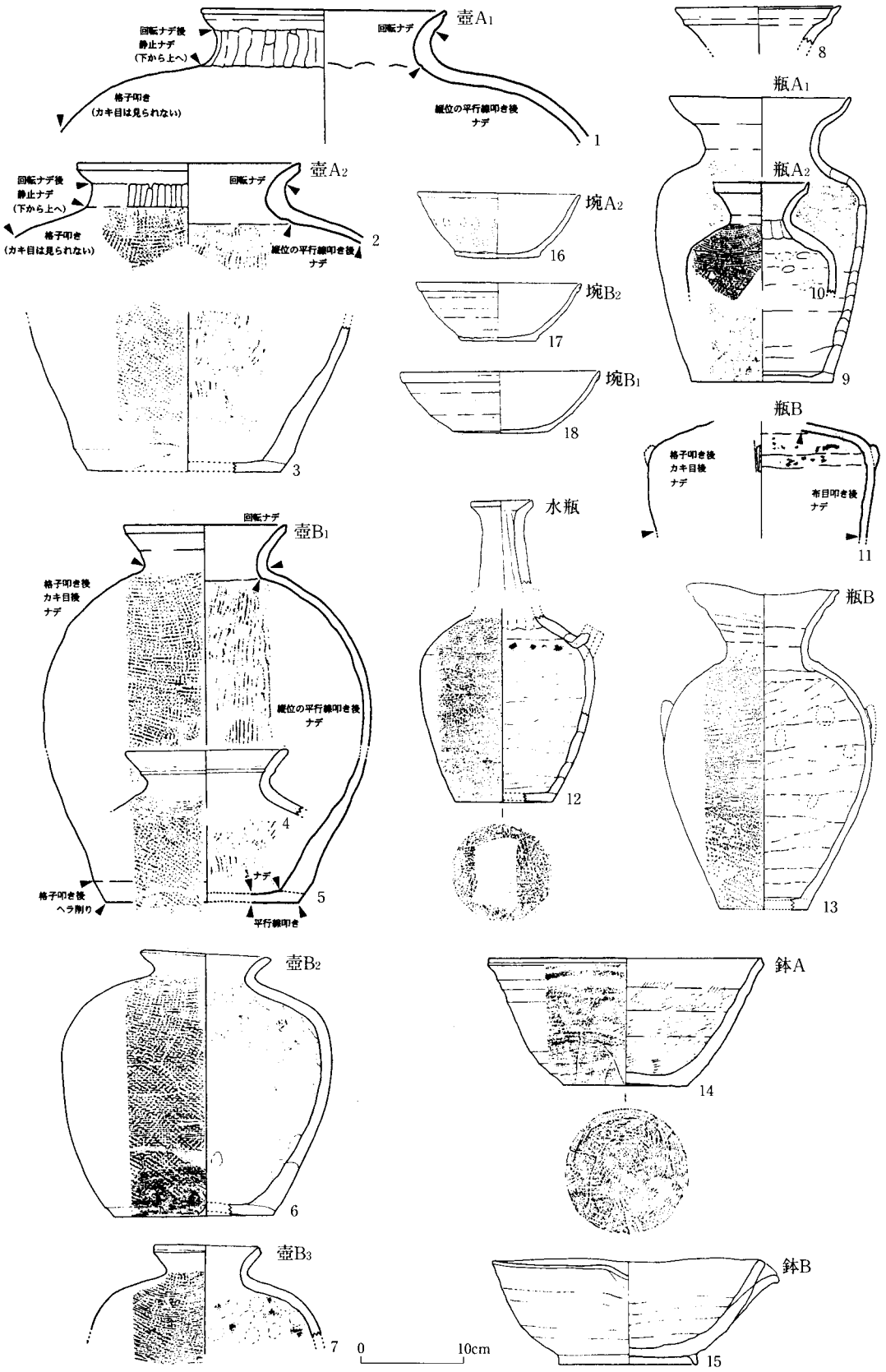


図7　熊本県下り山1号窯の器種組成（13のみ3号窯，註(5)・(27)）

白磁模作埦，擂鉢と狭口球胴広底壺のプロポーション，それに大形貯蔵器の生産量が少ないことぐらいで，主産品である壺は器形・法量ともはるかにバリエーションにとみ，加飾を含む打圧・押圧原体の文様も豊富である。鉢類に供膳・貯蔵・調理器風の多様な型式がみられ，擂鉢（鉢C類）の占める比重が低いのも，カムィ窯の特色である。一方，③生産技術は埦を含む全器種を紐叩打成形とする点で，下り山窯をはじめとする西日本の諸窯より一段と徹底した技術の斉一性を示しており，さきの壺類の多様な作り分けの原理と異質の生産組織，需要層ないし用途の地域性として注視されよう。

ここでさらに，カムィ焼の中世陶器としての特殊性について考察をすすめようとすると，従来からいわれてきた高麗無釉陶器[29]，および中国陶磁との関係についてあらためて検討する必要が生ずる（図8）。

まず高麗陶器との関係については，①甕・壺にみられる列島の中世陶器に例がない胴部の横位叩き回し成形と，完成した胴部に口頸部を接ぎたしたうえで叩打する手法，②胴部の極薄手仕上げと内壁の器面凹条調整，③上胴の波状文帯による加飾，樹枝文をはじめ放射文・幾何学文などの打圧・押圧原体の意匠，④新羅時代以来の固有の壺C類，鉢A・E類の存在，⑤高麗陶器のすべてでないが，陶胎がセピア色，陶皮が青灰色に発色する堅緻な焼締め陶器とする焼成法との共通性，として要約できよう。このほか，西日本の中世諸窯でみられない焼台が使用されているのも，高麗陶器窯の馬蹄形陶枕（トチン）が移入された可能性がある[30]。なお，12世紀末～13世紀初頭ころかとみられる慶州王宮里遺跡の高麗陶器を実見した赤司善彦は，口縁下端に紐土紐を貼付した壺C1類口縁に近似する甕口縁が存在する反面，胴部の研磨調整がカムィ焼でみられないことを指摘している[31]。たしかに，甕・壺類の作工は類似点のみを強調できないのであって，高麗陶器より頸部のくびれがゆるく，やや厚手で入念さを欠くだけでなく，口縁形態をはじめとする器形はかなり異なる。すなわち，鴻臚館跡・大宰府跡で出土している11世紀後半～12世紀前半代の高麗壺類に目立つ重心の低い球胴広底タイプは，カムィ窯の壺B類に一応対応するものの，主流をなすのは長胴壺で，狭口長胴壺（AI類）の一部は南九州系とみられなくもないが，高麗壺に通有の盤口（ばんこう）（有段口縁）がまったく写されていないなどの差異がある。

つぎに，中国陶磁との関係であるが，①カムィ窯の埦類は，高台を省略し，全体に器高が高く，底径が広め，口縁が内屈ぎみに作られているものの，白磁碗II・V類の口縁形態の特徴をかなり忠実に写している。その点下り山1号窯の模作埦は，須恵器埦の平高台風の作工とあわせ転写度が低く，カムィ焼のそれは猿投窯を中心とする東海の諸窯[32]のレベルにはおよばないものの，埦がすべて独自型式の模作埦として終始したところに，列島の中世諸窯では例をみない供膳器の強い中国示向が読みとれよう。そのほか単発的だが，②鉢F類，鉢CII類は，それぞれ中国陶磁盤I1類，III類，鉢G類は合子がモデルとしてよく，③長頸瓶とした283も，手付水注I類[33]写しの可能性がある。

ところで，カムィ焼の南西諸島における消費の実態については，在地の研究者により鋭意データの集成・分析が進行中である。出土地の傾向としては大多数が各種の壺で占められ，甕・鉢・埦・水注は僅少[34]で，小壺が蔵骨器や葬祭器に用いられたことはつとに指摘されている[35]。ただ，近年の村落的遺跡の調査では普遍的に定量の壺類が消費されたことが判明しつつあり[36]，列島にみられる

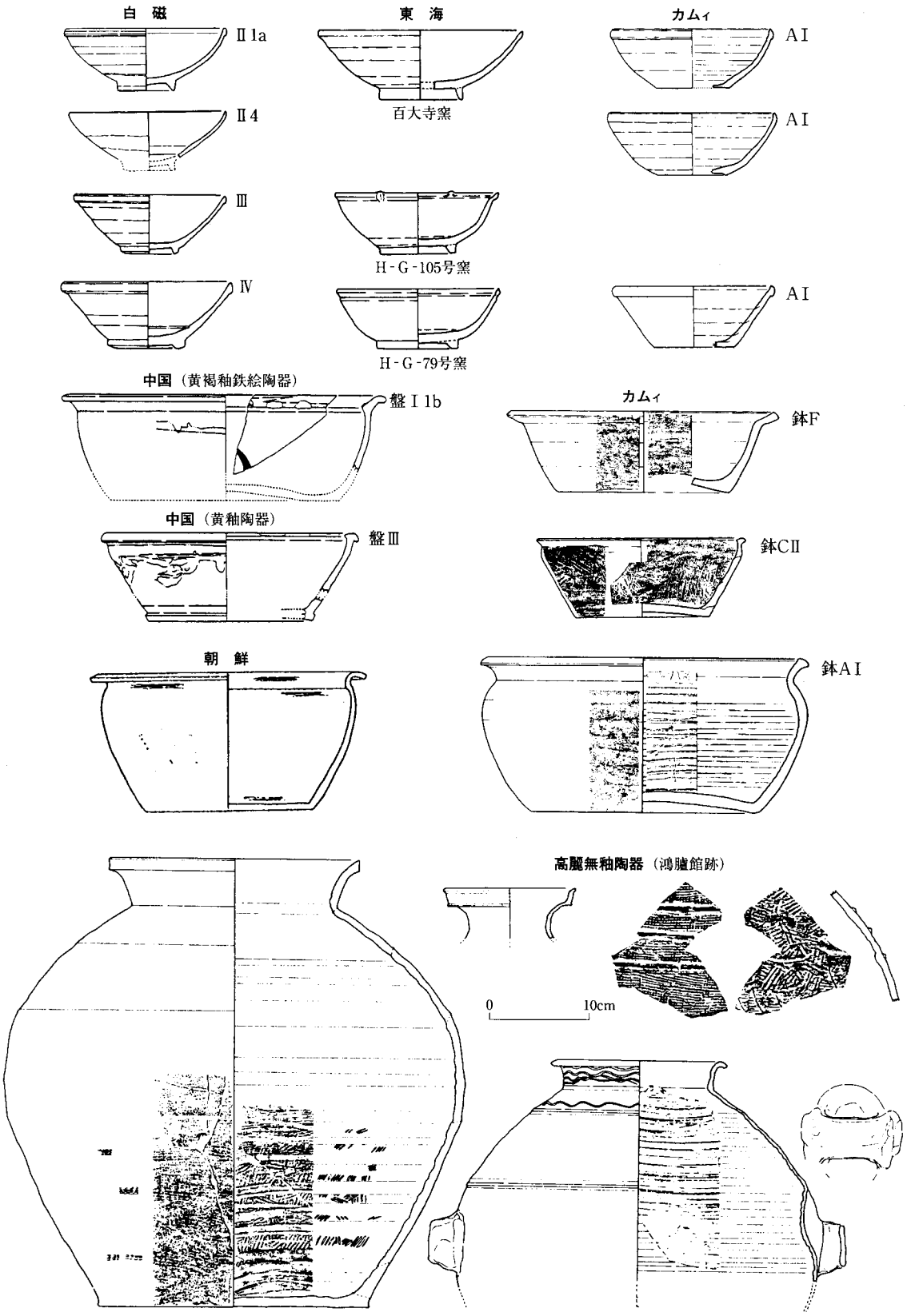


図8　カムィ焼と朝鮮・中国陶磁（註(4)・(29)・(31)・(32)）

都市での大量需要，地域の開発資材としての甕・壺・擂鉢と同等に論じられないとしても，日常的消費を軽視できないと考える。

このように広域窯としてカムィ窯をみると，大甕・大壺＝大形貯蔵器の生産が低調，擂鉢の量比が少ない点で変則的であり，列島の中世窯業を東海西部と瀬戸内東部を核とする同心円的展開の構想からすれば，下り山窯は周辺圏の傍系窯，カムィ窯はさらに外辺圏の周縁窯となり，そのことは広口瓶の欠落，擂鉢の模擬的な卸し目，刻文の施入部位・図形の恣意性にみる情報伝達の不正確さ（意味の喪失）などによく現れている。しかし，古代須恵器生産の伝統をもたない南西諸島の一角で，高麗系陶技をベースに，中国系器種をとりこみ，貯蔵・調理＝「ケ」の機能と壺瓶＝「ハレ」の機能の未分化な合体を思わせるバリエーションと，加飾性を強調する壺を主産品とする地域性の強い複合的な型式群を創出したことは，列島の中世窯の発現に確実に連動しながら，波状文帯で飾った葬祭用の小壺に具象されるような，南西諸島向けの器種組成としてアレンジされたことをうかがわせる。そして，そうした南島型の中世須恵器としての地域性（自立性）が半島・大陸の外来系要素に規定された点で，まさに中世初期の国境界での，“人・モノ・技”の交流が生み出した歴史的産物として評価すべきであろう。

❹……カムィ開窯をめぐる史的背景（予察）

陶業史におけるカムィ焼を上記のように位置づけたばあい，カムィ開窯にあたり朝鮮系陶技の導入を陶工の招寄レベルでとらえるか，陶技のみの間接的な伝播とするかが問題となるが，特定器種の選択的採用や形姿の模作にとどまらず，壺の製作・焼成技術から打圧・押圧原体の意匠におよぶことから，朝鮮人陶工が招寄されたと考えられる。もっとも高麗陶磁の流入は，博多・大宰府と渡航コースの壱岐・対馬，そこから肥前・豊前など北九州ゾーンでの二次的な点的拡散に限られ，南西諸島と高麗の直接交渉を裏付ける物証は乏しい。その点で列島の狭域中世窯の展開が，12世紀後半の瓷器系陶技の第1次波及の段階で，直前まで常滑製品の流通圏に組みこまれていた越前と南加賀に在地の瓷器系窯が成立するような事情[37]とは異質である。つまり，南西諸島の食（器）様式と無縁の外来系陶技が突然導入されたことになり，カムィ窯の経営主体を奄美諸島の在地勢力に求めることを躊躇させる（後述）。

また，窯場がなぜ徳之島で開窯されたかも問題であるが，窯場一帯に名瀬粘板岩凝灰岩層が露頭し，窯跡群発見の端緒ともなった山麓の豊富な湧水（池水）に恵まれるという製陶の基礎的条件に加えて，2km強で西岸の鹿浦港に通じること，さらにトカラ列島北辺の宝島と奄美大島北方の上ノ根島間の七島灘が，黒潮と対馬暖流の分岐点にあたり，奄美・徳之島海域が琉球海の咽喉を扼するという自然・人文環境にあることは常識的に了解されるであろう[38]。奄美大島の琉球王朝への帰属は1441年前後とされるが，近接した「岐浦島」（喜界島）は征服されなかったようで[39]，中世前期の文献史料は皆無に近いため，考古学的状況判断をふまえたカムィ開窯の史的背後事情を探らねばならない。

列島南辺と奄美・徳之島海域との交渉でまず注目されるのは，長崎県西彼杵（にしそのぎ）半島産の滑石鍋[40]が南西諸島へもたらされ，在地で滑石粉を混和材とする石鍋模倣土器が普遍的に生産・消費されてい

ることである[41]。縦耳の石鍋A類の流入始期については議論があるが[42]，九州中部からの外的インパクトが長甕から平鍋へ変化し，同時的に肩が張ったカムィ焼写しとみられる耳付きを含む壺形土器が出現し，列島に連動して中世的貯蔵・煮炊様式への転換が図られたことは，カムィ開窯が九州から南下するインパクトに触発されたことを示唆する点で重要であろう。その間の事情を考える上で看過できないのは，肥後は石鍋が50遺跡以上で出土しているものの点的で，土鍋主体とみられるのに対し，薩摩の石鍋出土遺跡は12,13世紀を中心に83遺跡以上を数え，石鍋が煮炊器の中心で，それも薩摩半島西岸から奄美諸島まで列状に分布し，九州西岸から南西諸島に至る“石鍋の道”の実在を示すことである[44]。

また，亀井明徳は中世前期南西諸島の中国陶磁は九州経由でもたらされたと考え，奄美大島・小湊墳墓（名瀬市）から不時発見資料ながら，11世紀後半～12世紀中葉の中国陶磁（白磁碗4・皿1，黒釉碗1，褐釉四耳壺3），カムィ焼（壺1）が，蔵骨器と蓋のセットと推定される状況で出土していることに注目し，南西諸島で異例の納骨習俗から，被葬者を「薩摩以北と関係のある人[45]」かもしれないとする。納骨容器あるいは祭器としての使用例が，奄美諸島以南でどのていど普遍性をもつかは今後検証を要するが，完器の小壺は西原町内間遺跡でも出土しており[46]，中世的社会形成期に按司層をはじめとする南西諸島の有力者に納骨容器使用の習俗が広まったと推定しておきたい。さきの中国陶磁をモデルとしたカムィ焼の玉縁埦や合子・盤は，九州からの二次情報にもとづいて模作されたのでなく，流通量が少ない中国陶磁の代替品として奄美諸島の有力者向けに直模され，少量生産されたのであろう。

琉球海における奄美諸島の特性については，後世のグスク築造術などの地域性がいわれるものの，11,12世紀代に限定した考古学的知見は不分明のようである。ただ，さきの小湊墳墓が所在する南海岸の背後に玉縁白磁碗，カムィ焼などを出土する比高10m前後の低丘に堀切りを設けた伊津部勝（いつぶかち）グスクが占地し，初期の按司館跡の可能性が指摘されており[47]，将来一体的な墓域と生活・儀礼域として把握されるかもしれない。徳之島で窯跡群の南2kmに営まれ多量の中国陶磁，カムィ焼を出土することで著名な伊仙ミンツキタブク遺跡[48]なども，奄美諸島における在地支配層の成長をうかがわせ，カムィ開窯が窯構造の近似する肥後南辺（人吉盆地）をとりこんだ南九州勢力の主導下に進められたとしても，在来土器工人および補助労働力の編成などの前提として，在地支配層との連携が不可欠だったことは贅言を要しまい。そのことは，カムィ焼と鉄器，石鍋，中国陶磁の大流通を管掌する支配層の成長，農耕・牧畜の新たな展開に支えられた政治社会形成の大画期（貝塚時代からグスク時代へ）の開幕を告げる物証とする安里進の総括的な展望[49]とおおづかみに整合させて考えることができる。なお，奄美人が遠洋での軍事・経済活動を行う集団を組織していたことは，長徳2・3年（996・997），肥前に侵入し財物・男女を奪取した事件から知られる（『小右記』，『権記[50]』）。農耕などの労働力確保が主因のようである。

ところで，ヤマト列島と南西諸島をめぐる交易媒体者として常に引きあいに出されるのは，『新猿楽記』に登場する東は「浮囚之地」から西は「貴海（鬼界）之嶋」を渡り歩く右京の八郎真人に代表される京都の遠隔地商人であるが，唐物45種，本朝物30種に石鍋・鉄器のような生活財が含まれていたかは疑問で，有明西海域―薩摩半島―トカラ海域を結ぶ地域経済圏が連鎖する交易システムの流れを想定すべきであろう。中世前期の地域経済圏の実態は不透明であるが，後期には肥後

北部の樺万丈窯[51]の系譜を負う中世須恵器が環有明海圏を形成するようであるが[52]，近年の調査で中世前期の中継基地として鹿児島県持躰松遺跡[53]（12, 13世紀中心，日置郡金峰町尾下）が浮上してきた。

本遺跡は，薩摩南辺，野間半島の基部に河口を開く万之瀬川中流（河口から約4 km）の水陸道の交点に所在し，村落的遺構の検出にとどまるが，希少な磁州窯瓶・碗をはじめ白磁四耳壺・水注，黄緑釉鉄絵盤，天目など大宰府・博多に近似した高級品を含む中国陶磁の量比が高く，とくに集荷場特有のコンテナとみられる甕壺類[54]が定量出土して衆目を集めた。「当（唐）坊」「唐人原」の地名を残す河口部の調査未了のため全体像の把握はこれからであるが，河口部に推定される宋船が寄港した港湾[55]に連係する「川湊」を付帯する拠点遺跡[56]とするのは妥当と思われる。この遺跡が石鍋や中国陶磁を南西諸島へ移出する中継基地だったことを積極的に裏付けるに至らないが，北東2.5 km，金峰山麓に営まれ観音寺関連遺跡かとされる小薗遺跡とあわせ20片を越えるカムィ焼が出土していることは，強調されてきた対宋貿易の港湾ゾーンであるとともに，対南西諸島交易と深くかかわる中継基地であったことを物語っている。薩摩におけるカムィ焼出土地は，金峰町内の前記2遺跡のほか肥後に近接する出水市出水貝塚[57]が知られており，さきの南肥後下り山窯を包括する固有の南薩地域の実在を示唆する。

持躰松遺跡でいまひとつ留意されるのは，在地領主層の動向である。当遺跡を包摂する阿多郡の東域は「阿多郡司平忠景」の開発領として著名で，12世紀中葉には下野権守・薩摩国押領使として「一国惣領」し，一時南薩平氏系武士団の棟梁的地位にあり薩摩から大隅まで権益を拡大したが，平治の乱後硫黄島へ落去したとされる[58]。中世初期の九州の政治状況は，10世紀後半から11世紀初めにかけて大宰府へ進出した府官系軍事貴族＝南薩平氏勢力が，在地領主層を制圧して荘園公領体制の枠組みが確立されたと論定されている[59]。彼らの流通経済への対応について江平望らは，阿多忠景の勢威が薩南諸島および海上交易による私富蓄積が権益拡大の挺子になったと推定している[60]。これに考古資料を重ねていえば，石鍋の生産域をおさえた肥前平氏彼杵氏と薩摩平氏が同流の伊佐系平氏として緊密な関係を保持していたとされることから，配下の海民集団間に石鍋・鉄器をはじめとする日常物資の物流ネットワークが存在したことは推察に難くない。

ここまでの整理で，第1に，カムィ開窯を契機に，貝塚時代に独自の生活文化圏を形成してきたトカラ，琉球，先島のエリアを超えた琉球海全域にカムィ焼の広域流通圏が形成され，列島に連動した中世的食器様式へ転換し，農耕・牧畜の普及と按司層の成長に支えられたグスク時代開幕の指標となること[61]。第2に，中世初期に肥後南辺を含む南薩に，博多・大宰府に交易機能が集約される前段階に中間寄港地が所在した可能性[62]が強まり，かつ南西諸島との交易活動の中継地でもあったとみられること。第3に，南薩平氏勢力を核とする在地領主の成長と結集がすすみ，大宰府，肥前の武士団とも連係しつつ自立的な政治・経済圏が形成されていたらしいことが推定された。しかし，これだけではカムィ窯を基本的に規定した高麗と奄美海域の結びつきは説明できない。あらためて，琉球海全域を視界に入れ，徳之島での製陶を支える基礎条件を咀嚼した上で，高麗陶工を招寄し異系の陶技を複合してオリジナルな中世陶器を創出した，南島の中世的「開発」をめぐる東アジアの動態を探ってみよう。

中世初期の日朝交渉は，寛仁3年（1019）刀伊の変後の日本人送還を契機に朝貢形式をとって貿

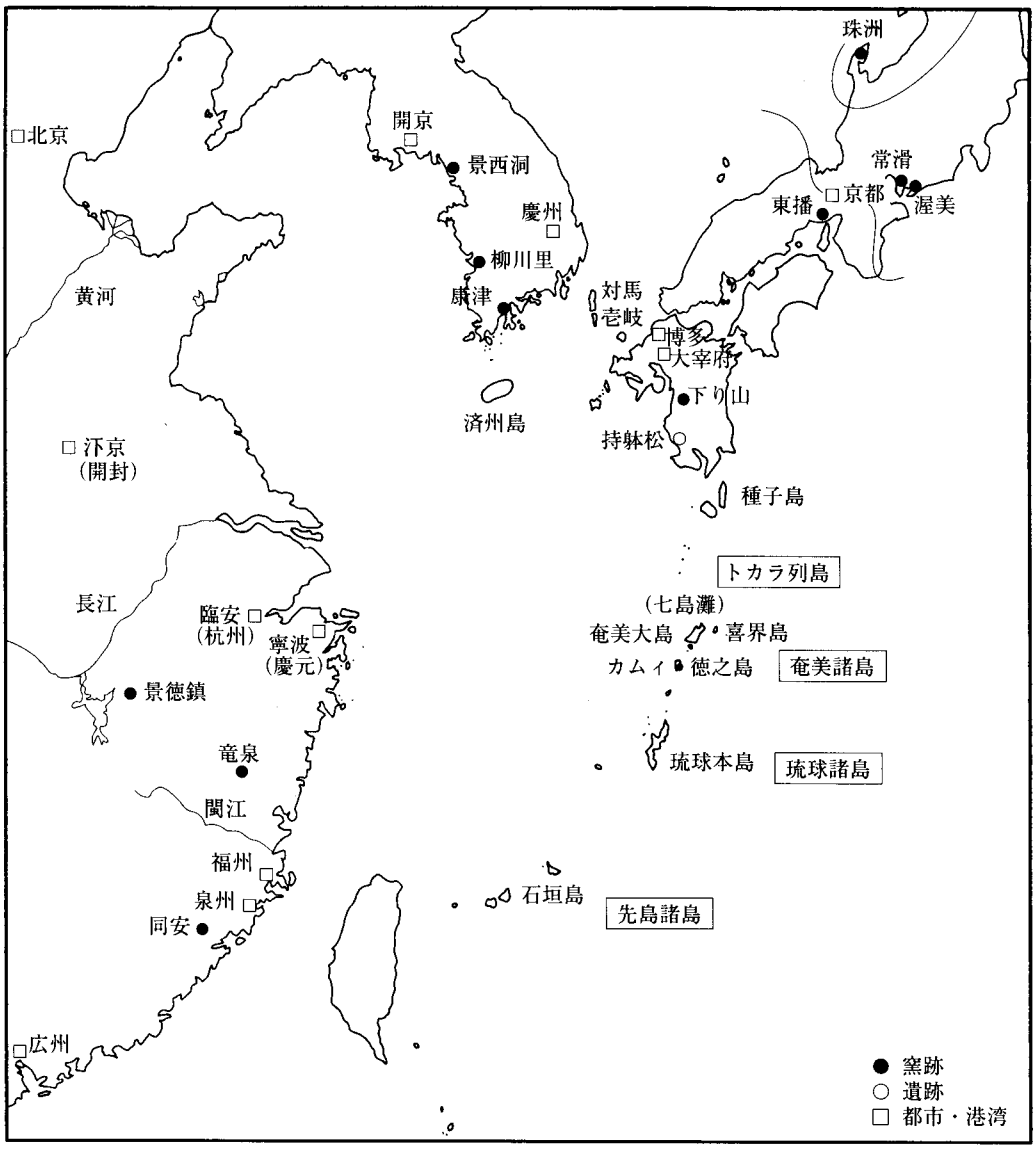


図9　中世前期の環東アジア海域要図

易が活発化し，高麗文帝・宣帝代（1041～1095）には渡航20回を数え，大宰府吏官らと結托する商人による通商が行われたが，11世紀末に終息したとされる。その間「日本国使」，壱岐・対馬「勾當官」「島使」とともに「薩摩州使」（1080）もみえ，宗像氏と縁戚を結ぶ宋商客とみられる「日本国人王則貞」（1073）も登場する[63]。高麗前期の陶工は，陶磁を「貢賦」する「匠人」として「磁器所・甕器所」に編成され王朝に管轄されていた[64]。したがって，陶工の招寄は，日・宋商人からの工芸品・学芸品・水銀などの献上に対する回賜とも推察され，徳之島への招寄については日・宋商人の媒介が予想されよう。奄美・徳之島海域におけるグスク時代への転換については，前記小湊墳墓の被葬者集団を在地の按司層とすれば，さきの長徳事件でみられた奄美海民の行動とあわせ，港湾を基地とし琉球海の島回り交易の一翼を担う支配層の成長が認められることになる。琉球王朝成立の前段階に900 kmにおよぶ海洋での広域流通が，たとえばさきの八郎真人のごとき京商人や

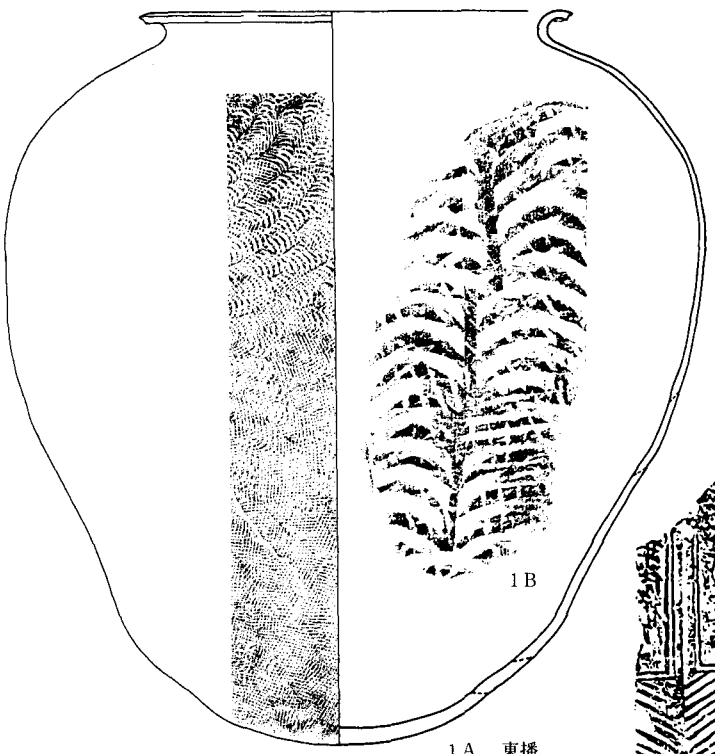
南薩のいわゆる“海の武士団”，特定の按司層，あるいは奄美大島倉木崎沈船遺跡[65]（宇検村）の調査から推定される，南島ルートで航行した宋商人によって一元的に管轄されていた状況は，カムィ焼の分布が琉球弧周域の島嶼まで分布することから考え難い。この段階の先島諸島を包括する物流網の形成は，中継島を結ぶリレー式のモノの移動だったにせよ貝塚時代の文物の移動・伝播と異なり，中国を核とする東アジア貿易圏の北辺に組みこまれたヤマト列島の海洋国家化に連結する南方ルートでの動きであり，基本的に中国南部を発着地とする宋船の傍流的な南島往来ラインに乗った，按司層のネットワークによる流通と推定される。

ただし，徳之島を帰着地とするトカラ海域については，阿多忠景に具象される南薩の在地領主が，大宰府吏官，博多商人とも連係しつつ配下の海民集団を介して海上交易に関与し，中世的開発の延長上に南島の経営を実施した可能性がある。南薩の有力領主が奄美諸島を列島の南境界として認識していたことは，時代は下るが得宗領（川辺郡司職）の管理にあたった千竈（ちかま）時家の嘉元4年（1306）処分状に，坊津・泊2湊とともに硫黄島以下の口五島から徳之島に至る島々が記載されている[66]ことが傍証となろう。政治・経済が流動的で中世的社会体制が未定立な11世紀後半ないし12世紀前葉にみられる徳之島カムィ窯の突然の開窯は，南薩在地領主が主導し按司層との連携を図り，招寄された高麗陶工の指導をうけて南九州の陶工が在地の土器工人とともに編成され，南島型の中世須恵器が創成されたと想定しておきたい。高麗陶工の招寄コースが大宰府経由だったか，南薩へ直接呼びこまれたかはにわかに判断できないが，壱岐・対馬と高麗コースでも11世紀末には，はやくも倭寇的行動の兆しがみえるなど，九州の北界と南界で在地領主と海民・海商集団の広域的な交易活動が展開され，徳之島でリンクする一般状況が実存したように思われる。

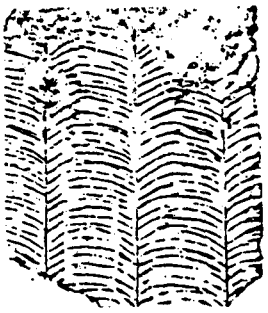
中世初期日麗の文物・技術の交流については，はやく上原真人が六勝寺をはじめとする11～12世紀中葉の宮殿・寺院所用屋瓦文様の大部分が高麗屋瓦に由来するとし，いわゆる国風文化の再検討に向けて重要な問題提起を行った[67]。その後，筆者は能登・珠洲窯産の刻画文陶器の画題・描法に注目し，壺に顕在する綾形文叩打意匠の系譜を東播系陶技の移植の一環とみ，高麗屋瓦やカムィ焼の綾杉文叩打意匠との関係を模索したが，成文化に至らなかった。これに対し荻野繁春は，珠洲焼刻画文の構図の一類を高麗青磁の蒲柳水禽文と直接対比させ，綾杉文の源流を高麗屋瓦に普遍的な「樹枝文痕」に求め，その影響が常滑焼の押印意匠に及ぶとして，広大な樹林帯を生業の場とする遼・金王朝文物の南漸を展望した[68]（図9）。

近年は，こうした陶枝の交流に加えて，かねて美術史から指摘のあった梵鏡や，11～14世紀に日本産の瑞花双鸞八稜鏡などを踏み返した同型の高麗鏡が流布していることが綿密に検証されつつある[69]。このように，中世初期の段階で，高麗系陶技・意匠のみならず金工部門でも高麗文物の斬新な造形とデザインを摂取する気運が強く，大蔵経もまた高麗版本が将来されていた[70]ことは，予想をはるかに上回る広がりと深まりをもって，中世初期の日麗交渉が展開していたことを物語っている。

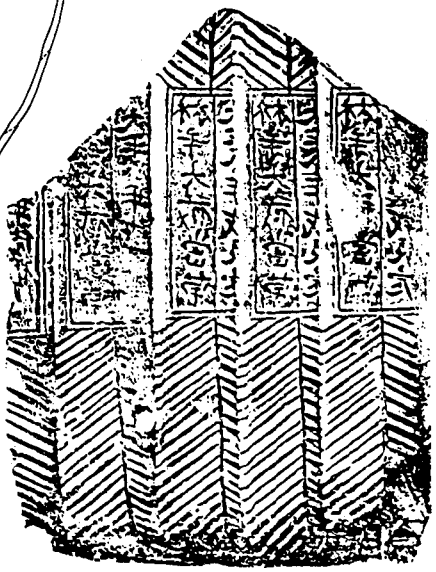
問題の樹枝文が東播諸窯で採用された経緯については，それが高麗陶器でなく屋瓦に発現することは，高麗屋瓦でしばしばみられる葉脈を曲線で表現する特徴的な意匠（荻野C類）が，東播甕に転写されている（図10-1）ことからいえると思われる。列島の平瓦の叩打文に樹枝文は採用されなかったが，高麗の瓦当文様は，藤原道長の造営にかかる京都・法成寺（京都市上京区，1020



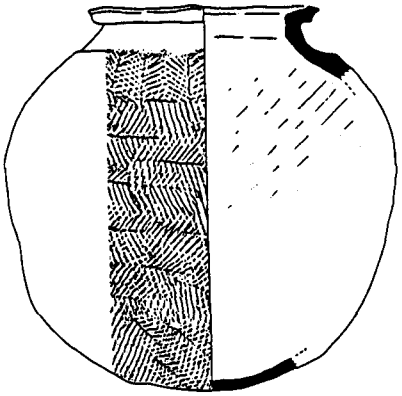
1A　東播
(平安京左京8条3坊2町跡)



2　朝鮮・万福寺跡

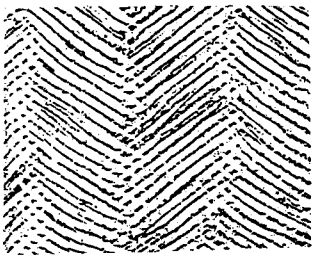


3　朝鮮・定林寺跡（大平8・1028年）

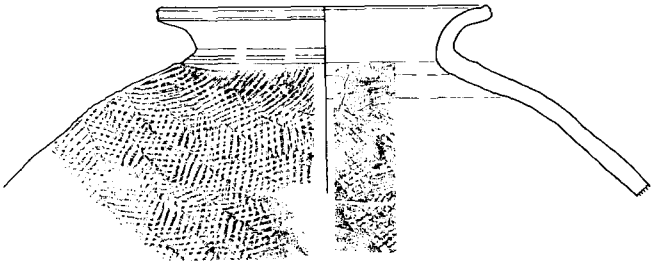


4　東播（京都府矢谷遺跡）

5　東播（兵庫県魚住窯）



6　珠洲



7　カムィ

8　高麗（長崎県木坂海神神社跡）

図10　朝鮮・日本の樹枝文・綾杉文

1A〈財〉古代学協会『平安京左京八条三坊二町』，1B　吉岡，2～4　註(67)，5　明石市博・平安博『魚住古窯跡群発掘調査報告書』，6　註(10)，7　註(4)，8　註(29)
(1A：1/10，4・7：1/5，5・6・8：1/2)

年）阿弥陀堂建立の所用瓦が洛北官窯および丹波・王子窯へ発注されたのを嚆矢とし，11世紀後半以降，播磨・讃岐・尾張など多くは国衙を介して求心的・波状的に持ちこまれている。[71] 東播甕の樹枝文は12世紀中葉を遡らないようであるが，[72] 葉軸を省略した綾杉文叩打原体は珠洲窯へ2次的に伝播したと考えている。ここでは，樹枝文は高麗系瓦当文に付随して情報が伝達されたと考えられるが意匠のみの受容で，軒平瓦の製作は日本固有の瓦当折り曲げ技法によっているところに，高麗系文物の導入のあり方が端的に示されているといえよう。そのばあい，文物・技術の移入は商人・僧侶などを媒体としながら，朝貢形式のルートによってまず京都へもたらされ，二次的に瀬戸内・東海へ伝達されたとみられることは注意しなければならない。

彼我の文物・技術の交流システムは，たとえばさきの日本鏡の高麗移入が，文宗27年（1073），王則貞・松永年ら42人の入麗時に東宮・諸令公府への献上物に「鏡箱」がみられるように，献上品が官営の「銅所」へ持ちこまれ，それが踏み返しの原鏡とされる状況も推察され，屋瓦意匠の将来はその逆ルートが考定できるように思われる。なお，そのさい考慮されるのは，木工寮へもたらされたのが屋瓦意匠のみだとは考えにくいことである。白河法皇が承保2年（1075）造営に着手した六勝寺第一の法勝寺は，南北中軸線上に主要伽藍を配置するが，南大門の北に広がる苑池（「瑤池」）の中島に立つ檜皮葺の八角九重塔（永保3・1083年）は，高さ27丈（約81 m）の巨塔として周知されている。戦前より金堂と八角形平面の塔が中軸線上に並ぶ伽藍配置は中国・朝鮮に多く，現存する応県仏宮寺（遼，清寧2・1056年）とあわせ建築史家による研究が蓄積されてきた。[73] 建築史の門外漢が軽々に論ずることは慎まねばならないが，中世初期の日麗交渉の一環として，高麗寺院の伽藍配置と八角塔プランが移入され，そうした建築様式を飾る屋瓦意匠として高麗系意匠も採用されたと考えられないであろうか。この点はなお厳密な論証を必要とするが，総合的な状況判断から導かれる仮説を提示し諸賢のご教示をまちたいと思う。

以上，屋上架を重ね考定をめぐらしてきたところによって，中世初期の日麗の文物・技術交流には，高麗系屋瓦（あるいは王宮建築）から発信した瓦当文様および樹枝文の流伝にみられる，京都を核とする求心的かつ意匠の受容レベルにとどまった公的様相の濃厚なシステムと，南薩を核とする南九州勢力と高麗・南西諸島が連係した職能民の移動を伴うカムィ焼のように，民間ベース（大宰府経由での高麗陶工の招寄とすれば半官半民）の両様があったのではないかとの見通しをもつに至った。後者は，村井章介によって精力的に開拓された，中世後期の東アジア境界域で展開した領主・商人・海民によるマージナルな交流空間[74]に先行する，中世前期の“倭寇的世界”の実像の一端を語る動向といえるが，たんに時間軸を遡らせたというだけでなく，公私の関与の仕方，流通経済の進展度をはじめとする中世初期の特質を，国家論とかかわらせ今後追跡してゆくことが要請されよう。[75]

小稿の執筆にあたり，下記の方々から現地調査および文献の提供についてご高配をえた。記して深謝します。

義憲和・當眞嗣一・金武正紀・大城慧・池田榮史・安里進・金城亀信・伊藤勝徳（沖縄），新東晃一・青崎和憲・宮下貴浩・渡辺芳郎（鹿児島），甲元真之・島津義昭（熊本），安楽勉（長崎），山崎純男・山本信夫（福岡），定森秀夫（京都），冨島義幸（石川）

註

(1)――多和田真淳「須恵器に関する記述」『勝連城第1次発掘調査概要』琉球政府文化財保護委員会（1965）。

(2)――白木原和美「類須恵器集成（奄美大島・徳之島・喜界島）」『南日本文化』6（1973），同「類須恵器の出自について」『熊本大学法文論叢』35（1975）。

(3)――佐藤伸二「南島の須恵器」『東洋文化』48・49（1970）。

(4)――新東晃一・青崎和憲ほか『カムィヤキ古窯跡群』I・II，伊仙町教育委員会（1985）。

(5)――横尾泰宏・松本健郎・勢田広行『生産遺跡基本調査報告書』熊本県教育委員会（1980）。

(6)――安里進「琉球―沖縄の考古学的時代区分をめぐる諸問題　上・下」『考古学研究』135・136（1987・88）。

(7)――安里進「沖縄の広底土器・亀焼系土器の編年について」『交流の考古学』（1991）。

(8)――池田榮史編『類須恵器出土地名表』（1986）。

(9)――「ヤマト列島」（本州・四国・九州）は，藤本強がかつて提唱した「北の島」「南の島」に対する「中の島」という時空間の認識にもとづく名称として使用する（『もう二つの日本文化』東京大学出版会，1988）。そのばあい，「蝦夷島」「琉球列島（南西諸島）」が「北の島」「南の島」に対応することになる。

(10)――吉岡康暢『中世須恵器の研究』（1994）176～178頁。以下，小稿で使用する用語は本書による。その後「一連叩打技法」に検討を加えた論考として，佐藤竜馬「十瓶山窯と亀山窯」『〈財〉香川県埋蔵文化財センター研究紀要』VI（1998），註(27)出合文献，註(50)美濃口文献がある。

(11)――佐藤竜馬のご教示による。

(12)――島袋洋は，カムィ焼後期の器面調整を綿密に検討している（嘉手納町教育委員会『屋良グスク』，1994，44頁）。

(13)――註(4)文献。

(14)――縦位叩打は，ヤマト列島では古代須恵器と中世須恵器を識別する1指標となる（註(10)文献247頁以下）。なお，古代須恵器の製作技法については，北陸古代土器研究会『シンポジウム　古代の須恵器貯蔵具』II（2000）参照。

(15)――註(10)文献396頁以下。

(16)――各部位の相関値を指数化し，器形・法量を統一的に測定する客観的方法として，たとえば甕壺類については，「口胴指数」＝口径÷最大胴径×100，「高胴指数」＝器高÷最大胴径×100，「底口指数」＝底径÷口径×100の数値を小数第1位で切り上げ，指数によってシミュレイトされる形象の変化を「型体」と呼ぶ。すでに「口径指数」など編年作業に広く活用されてきたが，全器種に一貫して適用することで，型式分類に有効である（註(10)文献272頁以下）。

(17)――註(4)文献。

(18)――註(7)文献。

(19)――高宮広衛「恩納村熱田原貝塚調査概報」『沖大論叢』9-1（1969），金武正紀『恩納村熱田貝塚発掘調査ニュース』沖縄県教育委員会（1978）。

(20)――金武正紀ほか『銘苅原遺跡』那覇市教育委員会（1997）。

(21)――安里進「グシク時代開始期の若干の問題について―久米ヤジャーガマ遺跡の調査から―」『沖縄県立博物館紀要』1（1975）。

(22)――金武正紀ほか『ヒヤジョー毛遺跡』那覇市教育委員会（1994）。

(23)――当真嗣一ほか『稲福遺跡発掘調査報告書』沖縄県教育委員会（1983）。

(24)――『今帰仁城跡発掘調査報告』I.今帰仁村教育委員会（1983）。

(25)――福山市教育委員会『福山市文化財年報』19（1983），佐藤昭嗣「備後の窯跡」『草戸千軒』163（1976）。

(26)――古代猿投窯のいわゆる王子型水瓶は常滑窯で再生されるが，高台を省略し体部が球胴化するとともに，頸部に突帯を付加した個体が多く，13世紀代まで存続するようである（赤羽一郎・小野田勝一『常滑渥美』日本陶磁全集8，中央公論社，1976など）。なお，渥美窯では水瓶は未確認，珠洲窯ではいわゆる布薩型水瓶写しの水瓶が13世紀前半まで生産されている。なお，モデルとされた金属製水瓶の分類は，再検討を要する。

(27)――出合宏光「下り山窯跡研究ノート」『肥後考古学』10（1997）。

(28)――カムィ焼を器質と組成から「中世陶器」（「中世須恵器」）と認定することは，南西諸島のグスク時代を中世的社会の視点から比較検討する手がかりとなるが，中世社会に同定しようとしているわけではない。列島の廻船網を介する中世陶器の流通と，南西諸島におけるカムィ焼の流布を同質のシステムで理解できるかなど，今後多面的な考察が必要である。なお，南西諸島の社会史を考古学的に分析した労作に，安里進『グスク・共同体・ムラ―沖縄歴史考古学序説―』榕樹書院（1998）が

ある。

(29)――高麗無釉陶器については，鄭明鎬「高麗時代の土器」『考古美術』171・172合併（1986），姜熙天「高麗土器の基礎的研究Ⅰ」『郷土文化』6（1991），언세대 학교 박물관『고려시대 질그릇』（1991），吉岡完祐「高麗青磁의発生의関에研究」『崇田大学校博物館』（1979），赤司善彦「朝鮮製無釉陶器の流入―高麗期を中心として―」『九州歴史資料館研究論集』16（1991），山崎純夫『鴻臚館跡』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ，福岡市教育委員会（1991・92・93），安楽勉・阿比留伴次『木坂海神神社弥勒堂跡』長崎県峰町教育委員会（1993）など。

(30)――野守健『高麗陶磁の研究』清閑舎（1944），鄭良謨「高麗陶磁の窯址と出土品」『世界陶磁全集』18（高麗），小学館（1978）。

(31)――赤司善彦「徳之島カムィヤキ古窯跡採集の南島陶質土器について」『九州歴史資料館研究論集』24（1999）。

(32)――柴垣勇夫「山茶椀と白磁碗について」『愛知県陶磁資料館紀要』4（1985），尾野善裕「モデルとコピーの視点からみた古瀬戸と中国陶磁―古瀬戸成立期（12・13世紀）の様相―」『貿易陶磁研究』12（1992）。

(33)――中国陶磁の分類は，山本信夫ほか「中世食器の地域性―九州・南西諸島―」『国立歴史民俗博物館研究報告』71（中世食文化の基礎的研究）（1997）参照。

(34)――註(8)文献。

(35)――白木原和美「陶質の壺とガラスの玉」『古代文化』23－9・10合併（1971），註(2)文献。

(36)――註(20)・(21)・(22)文献のほか，西原町我謝遺跡（西原町教育委員会『我謝遺跡』1988），具志川市喜屋武グスク（具志川市教育委員会『喜屋武グスク』1988），糸満市阿波根古島遺跡（沖縄県教育委員会『阿波根古島遺跡』1990）などで比較的まとまったカムィ焼が出土しているが，前期に帰属するデータは少ない。

(37)――註(10)文献182・183頁。

(38)――徳之島町役場『徳之島町誌』（1960），『伊仙町誌』（1978），谷川健一「『古琉球』以前の世界―南島の風土と生活文化―」『琉球弧の世界』海と列島文化6，小学館（1992）など。

(39)――上原兼善「第2章1　琉球王朝の歴史」前掲『琉球弧の世界』210・211頁。

(40)――森田勉「滑石製容器―特に石鍋を中心として―」『仏教芸術』148（1983），下川達彌「生活を変えた職人たち　石鍋」『東シナ海を囲む中世世界』中世の風景を読む7，新人物往来社（1995）。

(41)――金武正紀「熱田貝塚」『掘り出された沖縄の歴史―発掘調査10年の成果―』沖縄県教育委員会（1982）ほか。

(42)――安里進は，最古の石鍋A類の初現を10世紀とする森田勉の編年観（註(40)文献）によって熱田貝塚出土の白磁より先行すると考える（註(7)文献，「熱田貝塚の石鍋A群とA群系土器の年代―金武氏の反論に答える―」『地域と文化』57，1990・2・15）。金武正紀は，熱田貝塚の包含層を短期間の形成とみセット資料とする（『琉球新報』1989・11・16朝刊など）。農耕・牧畜の定着やカムィ焼の初現年代ともかかわる論争であるが，白磁碗の上限年代である11世紀後半代を接点に再検証できないかと考えている。南西諸島の石鍋模倣土器の出現がヤマト列島の中世的食器様式に連動しているとすると，現在の知見では11世紀後半をそれほど遡らない実年代となろう。

(43)――三島格・島津義昭「肥後石鍋出土地一覧」『肥後考古』4（1983）。

(44)――栗林文夫「滑石製石鍋出土遺跡地名表―鹿児島県―」『大河』5（1994）。

(45)――亀井明徳「南西諸島における貿易陶磁の流通経路」『上智アジア学』11（1993）30頁。

(46)――「西原町内間散布地No.1出土のカムィ焼系須恵器」『西原町の文化財』西原町教育委員会（1998），盛本勲「第4章第6節　内間散布地No.1」『西原町史』（1990）。

(47)――中山清美「奄美のグスク」『日本考古学論集』吉川弘文館（1986），沖縄県立博物館『城（グスク）』（1992）など。なお，奄美諸島における政治的社会の形成をめぐる文献史的考察は，小林敏男「南島前近代社会研究に関する覚書―奄美大島を中心に考える―」『南日本文化』15（1982），同「南西諸島における平家伝説」同上21（1989），石上英一「古奄美諸島社会史研究の試み―奄美諸島調査に参加して―」『奄美学術調査記念論文集』南日本文化研究所（1992）など参照。

(48)――白木原和美・義憲和「大島郡伊仙町の先史学的所見」『南日本文化』9（1976）。

(49)――註(6)文献。

(50)――松田清編『古代・中世奄美史料』JCA出版（1981）。

(51)――亀井明徳「九州」『世界陶磁全集』3（日本中世）小学館（1977），美濃口雅明「樺番城窯跡の中世須恵器」『肥後考古』10（1997）。

(52)――樺万丈窯系の中流通圏の実態を明確に論証する

に至らないが，隈昭志・松本健郎『高橋南貝塚』熊本県教育委員会（1978），太田幸博ほか『山田城跡』熊本県教育委員会（1989），安楽勉・中田敦之ほか『楼楷田遺跡』松浦市教育委員会（1985）などの遺物を実見した所見。

(53)――宮下貴浩・柳原敏昭『持躰松遺跡第1次調査』金峰町教育委員会（1998），金峰町歴史シンポジウム実行委員会ほか『万之瀬川から見える日本・東アジア―阿多忠景と海の道―』（1999）。

(54)――大庭康時「博多綱首殺人事件―中世前期博多をめぐる雑感―」『法哈達』3（1994）。なお，山本信夫は，中国産貯蔵器の出土量比が多い遺跡は階層レベルが高いとする（註(33)文献）。

(55)――柳原敏明「中世前期南薩摩の湊・川・道」『中世のみちと物流』山川出版社（1999）など。柳原が万之瀬川南岸，加世田別府河口部の「当坊」に注目するのに対し，江平望は海運の基地として北方の「高橋」を重視している（「古代末期の薩南平氐―とくに平権守忠景と阿多四郎宣澄について―」『知覧文化』9，1972）。

(56)――宮下註(53)文献。

(57)――岩崎新輔・堂込秀人『出水貝塚』（1999）。

(58)――五味克夫「平安末・鎌倉初期の南薩平氐覚書―阿多・別府・谷山・鹿児島郡司について―」『鹿児島大学法文学部紀要文学科論集』9（1973）など。

(59)――野口実「鎮西における平氐系武士団の系譜的考察」『鹿児島経大社会学部論集』10-1（1991）など。

(60)――江平註(55)文献，野口実「薩摩と肥前」『鹿児島中世史研究会報』50（1995）。なお，野口は阿多忠景の勢威が南西諸島におよんでいた可能性をいわれる（「薩摩・琉球地域」『中世日本の地域的諸相』南窓社，1992）が，その範囲には言及されていない。

(61)――さきにカムィ窯の初現が，12世紀中葉に近い常滑写しの有台擂鉢や水瓶を含む下り山窯に先行するかもしれないとしたが（註(10)文献165頁），一方で南薩勢力の南下による開窯という全体状況が考定されるので，いぜん11世紀末～12世紀前葉の幅のなかでの確定作業がまたれる。

(62)――中世的政経体制が未定立で流動的な中世初期（11世紀後半～12世紀中葉）には，日本海域の越前・敦賀，若狭・小浜にも唐(宋)人の小居留地が実在した（吉岡康暢「新しい交易大系の成立」『考古学による日本歴史』9（交易と交通），雄山閣出版，1997）。

(63)――三浦圭一「II 第1章　10世紀―13世紀の東アジア」『日本中世の地域と社会』思文閣出版（1993）。

(64)――北村秀人「高麗時代の「所」制度について」『朝鮮学報』50（1969）。

(65)――元田信有『倉木崎海底遺跡発掘調査報告書』宇検村教育委員会（1999）。

(66)――小田雄三「嘉元四年千竈時家処分状について」『年報中世史研究』18（1993）。

(67)――上原真人「11・12世紀の瓦当文様の源流　上・下」『古代文化』32-5・6（1980）。

(68)――荻野繁春「"樹枝文痕"からみた東アジアの中の中世日本陶器」『福井考古学会会誌』7（1989）。

(69)――杉山洋「唐式鏡の生産と流通―瑞花双鸞八花鏡の場合―」『文化財論叢』II，同朋舎（1995），久保智康「V　東アジアの中の和鏡」『和鏡』京都国立博物館（1997）。

(70)――川上通夫「一切経と中世の仏教」『年報中世史研究』24（1999）。

(71)――上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14（1978），同「瀬戸内海を渡ってきた瓦」『大阪湾をめぐる文化の流れ―もの・ひと・みち―』帝塚山考古学研究所（1987）。

(72)――池田征弘ご教示。

(73)――村田治郎「応県仏宮寺の大木塔」『建築学会論文集』25（1942），冨島義幸「八角九重の幻の塔」『五重塔はなぜ倒れないか』新潮社（1996），同「法勝寺の伽藍形態とその特徴」『日本建築学会計画系論文集』516（1999）。

(74)――村井章介『アジアのなかの中世日本』校倉書房（1988），同『中世日本の内と外』筑摩書房（1999）など。

(75)――小文では，カムィ開窯の現実的契機が，琉球と高麗の直接交渉を前提とする状況にないと判断したため，彼我の交渉を14世紀後半以降とする通説に従う結果となった。今後，慶州・芬皇寺（634年創建）跡の石塔から石函に納置されていた荘厳具中に，高麗の銭貨崇寧重宝（1102～06）と南海産のイモガイが含まれ，12世紀初葉に遡る可能性が指摘されている（西谷正「高麗・朝鮮両王朝と琉球の交流―その考古学的序説―」『九州文化史研究所紀要』26，1981）など，関連資料の再検討が必要となろう。

（国立歴史民俗博物館名誉教授）

（2000年7月25日受理，2001年6月22日審査終了）

Bulletin of the National Museum of Japanese History
vol. 94 March 2002

The Medieval Sue Ware from the Southern Islands: Exchanges of Ceramics in the Pacific-Rim East Asian Seas in Early Medieval Period

YOSHIOKA Yasunobu

The medieval Sue ware produced at the Kamui Pottery of Tokunoshima, Kagoshima Prefecture, like Chinese ceramics and stone cooking vessels produced in the western part of Kyushu, has attracted attention as the material to represent the conversion from the shell-mound period to the gusuku period, which took place in the Nansei Shoto Islands.

This paper will present the classification of types and rough divisions of chronological sequence concerning the research materials of the year 1984, and specifically discuss one of the characteristics of the composition of pottery types that they mainly produced medium and small sized jars in spite of the fact that they spread as extensively as those of Toban, Tokoname and Suzu of the Yamato Archipelago, and the issue of the technology and design, as have been traditionally said, that followed Koryo ceramics as the primary model and Chinese ceramics as the secondary. Then, it will try to make a study for clarifying the actual situation of exchanges of "people, goods, and skills and techniques" in the Pacific-Rim East Asia in the period from the second half of the eleventh century to the first half of the twelfth century.

Kamui ware was composed of four types, namely, pots, jars, bowls and cups, and classified into seventeen kinds and thirty one groups. A variety of jars mainly followed the art of Koryo ceramics, with the wave-like decoration in the Koryo style, while the kiln structure was similar to that of the southern part of Kyushu. They are the medieval ceramics of heavy oceanic nature, born in a vast expanse of the southern sea boarder covering the Korean Peninsula (Koryo), the southern part of Kyushu (Japan), and the Amami Islands (Ryukyu). Further, the fact that they were distributed in volume all over the sphere of 900 kilometers in the Ryukyu Sea in early Medieval Period before the establishment of the Ryukyu dynasty clearly indicates that the Nansei Shoto Islands were integrated into the framework of Oceanic States of Asia as they were interlocked with the distribution network, which was to bring forth the medieval style of tableware of the Yamato Archipelago. The author's assumption is that the control system of Kamui ware resulted from the realm of *wako* (Japanese pirates) of early Medieval Period, which was propagated in connection with the class of Aji in the Amami Islands under the leadership of powerful samurais in the southern part of Satsuma, who took control of the harbors involved in

the trades with Sung and Koryo. For exchanges of goods and techniques between Japan and Koryo in early Medieval Period, it used to be assumed that they had been practiced only for a limited period of time until the relationship between Japan and Sung matured. However, it would be possible to say that the interchange was much wider and deeper than had formerly been assumed, according to the results in recent studies in Kamui ware, in the history of ceramics reflected in the Koryo-type roof tiles and the ceramics with the design of incised pictures, and in the field of metal work, such as mirrors and *bonsho* (Buddhist temple bells).